いずもおおやしろけいだいいせき

出雲大社境内遺跡

2004年3月

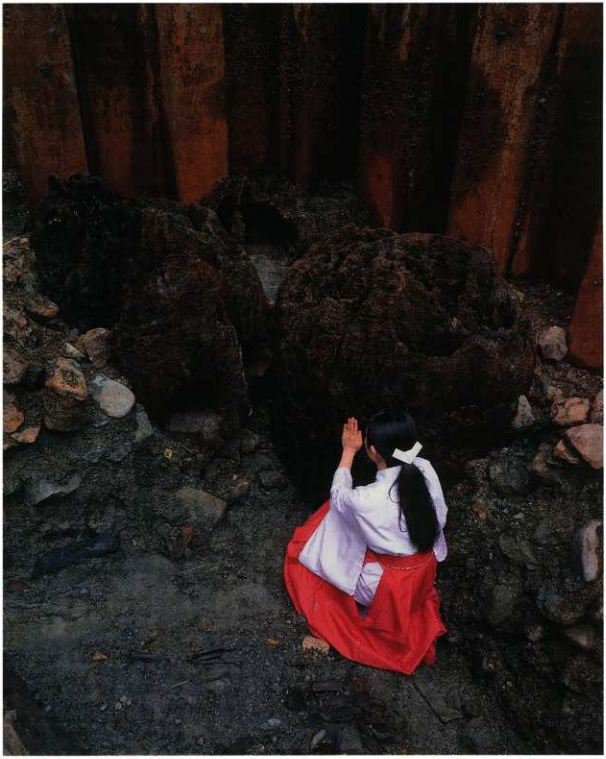
大社町教育委員会

いずもおおやしろけいだいいせき

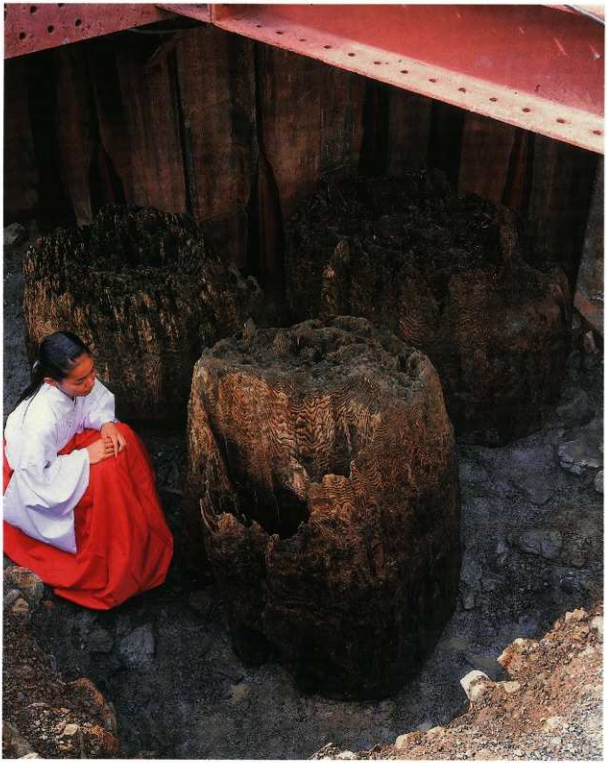
出雲大社境内遺跡

2004年3月

大社町教育委員会



宇豆柱（うずはしら）

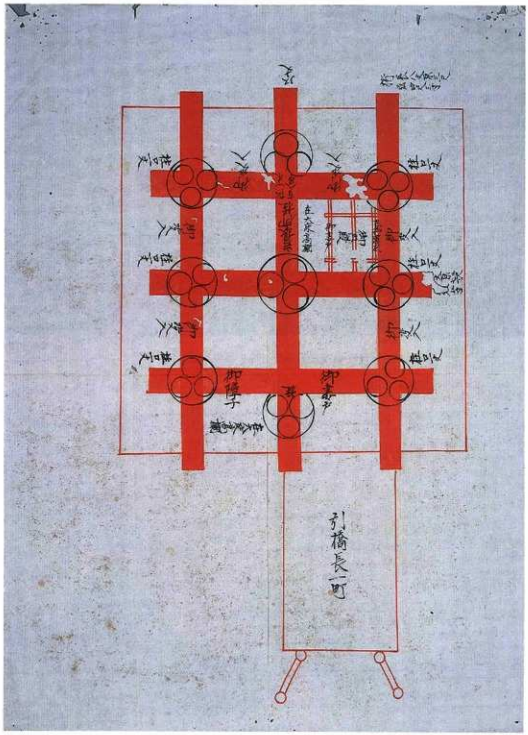


心御柱（しんのみはしら）

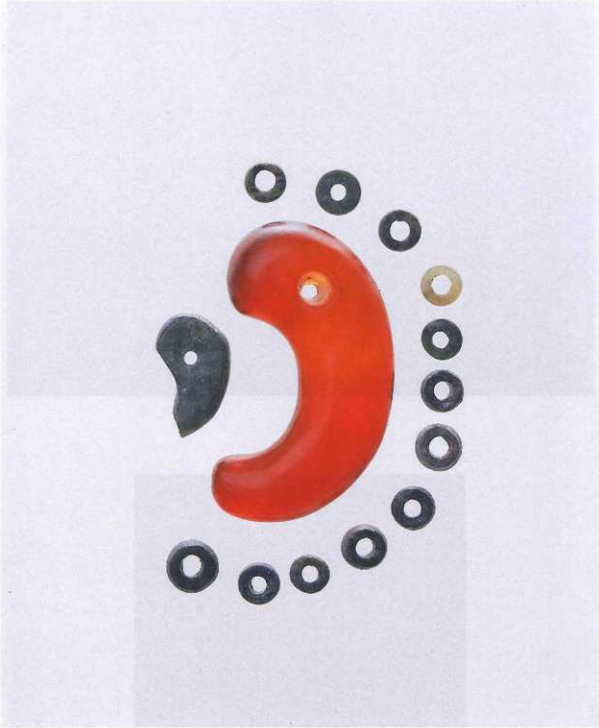
八足門前調査区全景（柱 3 箇所の出土状況）

宇豆柱底面出土の斫

巻頭図版 4



『金輪御造営差図』（千家尊祐氏所蔵）



勾玉・臼玉

（境内部分）

『絹本著色出雲大社并神郷図』（重要文化財・千家尊祐氏所蔵）

（境内部分）

『紙本著色杵築大社近郷絵図』（島根県指定文化財・北島英孝氏所蔵）

序

平成12年４月、出雲大社境内から巨大神殿の御柱が顕現し、当時、全国のトップを飾るニュースとなり、考古学をはじめ、文献史学、建築史学といった研究者はもちろんのこと、全国民の注目を集めました。

これまで、大社町は出雲大社の門前町として、長い歴史を経て発展し、歴史を彩る有形無形の文化遺産が数多く伝えられてきました。

特に、日本の神社を代表する出雲大社は世界に誇る文化遺産であり、現在もなお日本人の心の象徴として篤い信仰を集めておりますが、今回の御柱の顕現により、改めて出雲大社の長い信仰の歴史が明らかとなりました。

このように、本町には、出雲大社をはじめとする全国あるいは世界に情報発信できる大いなる遺産があり、正に島根の歴史と文化の宝庫と言えます。そして、古代から現代に至る各時代において、常に「神話の国しまね」のシンボルとして燦然と輝いており、さらに年間200万人を越える人々を迎える県内随一の観光地でもあります。こうした背景から、島根の歴史と文化の展示・研究施設である県立古代出雲歴史博物館が大社の地に建設されることとなり、この決定を契機として、本町では博物館を核にした新たな歴史文化都市として、また、「島根の顔」として、まちづくりの再編整備を推進していくことにしています。

こうしたことから、この度の報告書の発刊は実に時機を得たものであり、これからの歴史と文化を活かしたまちづくりを進める上で、大変貴重な基礎資料になるものと確信しております。

今回の発掘調査及び本書の刊行にあたり、格別のご配慮をいただきました出雲大社に深く感謝申し上げるとともに、調査指導をいただいた出雲大社境内遺跡発掘調査指導委員会、文化庁、島根県教育委員会を始め、執筆をいただいた諸先生方に対して心からお礼申し上げます。

最後になりましたが、本書が地域の歴史と文化財保護に対する理解と関心を高めるための一助となれば、幸いに存じます。

平成16年（2004）３月

大社町長　田中和彦

例　言

1．本書は、1999年（平成11年）９月から2002年（平成14年）まで４ヵ年にわたり大社町教育委員会を調査主体として実施した島根県簸川郡大社町出雲大社境内遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査組織は次の通りである。（職名等は当該年度のものである）

○平成11年度（発掘調査：受託調査）

事務局　阿部和男（大社町教育委員会教育長）、内藤秀雄（同教育文化課長）、影山雅大（同教育文化課課長補佐）、加村健悟（文化振興係長）、大梶智徳（文化振興係主事）

調査員　杉原清一（島根県文化財保護指導委員）、藤原友子（三刀屋町文化財専門委員）、景山真二（文化振興係主任）

技術指導　原田敏照（島根県埋蔵文化財調査センター主事）、岩橋孝典（島根県埋蔵文化財調査センター主事）、松尾充晶（島根県埋蔵文化財調査センター主事）、大野芳典（島根県埋蔵文化財調査センター補助員）

○平成12年度（発掘調査：国庫補助内容確認調査）

調査指導委員会委員　渡邊貞幸（島根大学教授）、井上寛司（大阪工業大学教授）、浅川滋男（奈良国立文化財研究所遺構調査室長）、藤澤　彰（芝浦工業大学助教授）・椙山林繼（國學院大學教授）、藤間亨（大社町文化財保護審議会会長）

指導助言　岡村道雄（文化庁文化財主任調査官）、坂井秀弥（文化庁文化財調査官）、臼杵勲（文化庁文化財調査官）

事務局　阿部和男（大社町教育委員会教育長）、内藤秀雄（同教育文化課長）、吉田明弘（同教育文化課課長補佐）、加村健悟（同文化振興係長）、稲根克也（同文化振興係主任）

調査員　景山真二（大社町教育委員会文化振興係主任）、石原聡（同文化振興係嘱託）

技術指導　松尾充晶（島根県埋蔵文化財調査センター主事）

○平成13年度（発掘調査：国庫補助内容確認調査）

調査指導委員会委員　渡邊貞幸（島根大学教授）、井上寛司（大阪工業大学教授）、浅川滋男（鳥取環境大学教授）、藤澤　彰（芝浦工業大学助教授）、椙山林繼（國學院大學教授）、藤間亨（大社町文化財保護審議会会長）

指導助言　福宜田佳男（文化庁文化財調査官）、加藤真二（文化庁文化財調査官）

事務局　阿部和男（大社町教育委員会教育長）、山崎勝（同教育文化課長）、吉田明弘（同教育文化課長補佐）、加村健悟（同教育文化課主査）、景山真二（同社会教育係主任）、大梶智徳（同社会教育係副主任）、手銭誠（同社会教育係主事）

調査員　石原聡（大社町教育委員会社会教育係主事）

技術指導　松尾充晶（島根県埋蔵文化財調査センター主事）

○平成14年度（発掘調査：国庫補助内容確認調査）

調査指導委員会委員	渡邊貞幸（島根大学教授）、井上寛司（大阪工業大学教授）、浅川滋男（鳥取環境大学教授）、藤澤　彰（芝浦工業大学教授）、椙山林継（國學院大學教授）、藤岡孝（大社町文化財保護審議会会長）
事務局	阿部和男（大社町教育委員会教育長）、吉田明弘（同教育課長）、吉川浩（同教育課課長補佐）、景山真二（同社会教育係主任）、大梶智徳（同社会教育係副主任）
調査員	石原聡（大社町教育委員会社会教育係主事）
技術指導	松尾充晶（島根県埋蔵文化財調査センター主事）

○平成15年度（報告書作成）

事務局	阿部和男（大社町教育委員会教育長）、吉田明弘（同教育課長）、吉川浩（同教育課課長補佐）、内藤直久（同社会教育係長）、大梶智徳（同社会教育係主任）、広沢陽子（同社会教育係副主任）
調査員	景山真二（大社町教育委員会社会教育係主任）、石原聡（同社会教育係主事）、露梨靖子（同社会教育係嘱託）

3．作業員

【発掘作業員】

青戸延夫、安立一男、五十嵐知子、池田幸申、板垣将信、糸賀司、糸原幸子、稲田陽介、上田忠、小川年秋、小川澄恵、奥井愈市、影山嘉一、春日昭二、嘉藤実、上川梨恵、鐘築幸男、小玉周平、桜内洋、昌子良吉、高崎直俊、手銭誠、土肥源市、永井宏子、中島高明、中筋隆仁、中山久夫、新田幸男、新田憲道、林秀樹、平等一成、平等巨、福江孝夫、福島美知子、藤原田市、祝部儀三郎、松浦弘、馬庭真由子、馬庭志麻、三原節夫、山根知雄、吉川幸男

【整理作業員】

石川真由美、江角ひろみ、加藤秀樹、坂根喜世美、清水作、山根寿美子、山根利江、渡部怜美

4．本書の刊行にあたり、次の方々から玉稿をお寄せいただいた。記して敬意を表する（順不同、敬称略）

渡邊貞幸（島根大学）、井上寛司（大阪工業大学）、椙山林継（國學院大學）、浅川滋男（鳥取環境大学）、藤澤彰（芝浦工業大学）、光谷拓実（奈良文化財研究所）、今村峯雄・坂本稔（国立歴史民俗博物館）、中村俊夫・丹生越子（名古屋大学年代測定総合研究センター）、小口千明（国際農林水産業研究センター）、朽津信明（東京文化財研究所）、北野信彦（くらしき作陽大学）、高安克己（島根大学汽水域研究センター）、渡辺正巳（文化財調査コンサルタント株式会社）、小椋純一（京都精華大学）、古野毅（島根大学）、落合俊夫・櫻井剛（島根大学総合理工学研究科）、藤井宏和（大和地質研究所株式会社）、本田卓・山口新吾（日立エンジニアリング株式会社）、吉川英樹・上野健一・油井三和（核燃料サイクル機構）、塚本敏夫（財団法人元興寺文化財研究所）、佐藤宏介・金谷一郎（大阪大学）

5．本書の刊行にあたって次の方々及び諸機関にご協力を頂いた。記して謝意を表する。（敬称略、順不同）

出雲大社・文化庁・島根県教育委員会・島根県埋蔵文化財調査センター・島根県古代文化センター・北島国造家

千家尊祐・千家達彦・千家隆比古・千家和比古（出雲大社）、北島英孝・北島建孝（北島国造家）、町田章・高妻洋成・肥塚隆保（奈良文化財研究所）、小野正敏（国立歴史民俗博物館）、徳岡隆夫・竹広文明（島根大学）、田中義昭、宮本長二郎（東北芸術工科大学）、辰巳和弘（同志社大学歴史資料館）、上田正昭、和田嘉宥（米子工業専門学校）、那須孝悌（大阪市立自然史博物館）難波洋三（京都国立博物館）、西澤英和（京都大学）、岩永省三（九州大学）、川越哲志（広島大学）、渡辺晶（竹中大工工務店）、八峠興（島取県埋蔵文化財センター）、勝部昭、宍道正年・卜部吉博・西尾克己・松本岩雄・内田律雄・内田融・足立克己・広江耕史・椿真治・池淵俊一・守岡正司・錦田剛志・品川知彦・岡宏三・佐伯徳哉・伊藤徳広（島根県教育委員会）、中村唯史（島根県立三瓶自然館）、野津旭、飛田恵美子

6．本書の執筆者については、目次に記す。

7．写真については、松尾・景山・石原が撮影した。なお、写真の一部は奈良文化財研究所牛嶋茂氏、西大寺フォト杉本和樹氏に撮影を依頼した。

8．遺構図面のうち、拝殿建設に伴う調査に関わるものについては、『故島根大学名誉教授山本清考古資料』（島根県埋蔵文化財調査センター保管）から借用して、加筆・掲載した。

9．遺構図面のうち、第6章第65図・第66図・第68図・第69図・第70図・第71図・第75図・第76図・第84図・第85図・第86図については、財団法人元興寺文化財研究所に委託して作成した3次元計測図面を使用した。なお、第23章第204～206図で使用されている図面は、現地で実測した図面を使用している。

10. 挿図中に図示した北方位および平面直角座標系のＸＹ座標は、日本測地系による測量法第3座標系の座標北および軸方位を示す。

11. 表記に用いた遺構略号は以下のとおり。

SB：建物　SD：溝　SK：土坑　SX：その他の遺構

ただし、特別に調査当時から遺構名称を付し、遺構略号を用いていない遺構もある。

12. 本遺跡の出土品は出雲大社、図面・写真類は大社町教育委員会で保管している。

13. 本書で用いた土器の分類及び編年観は基本的には下記の各論文・報告書等に依拠している。

(1) 弥生土器

弥生土器には松本岩雄氏の編年を用いたが、松本編年のＶ－４様式については、鹿島町南講武草田遺跡編年を用いた。

松本岩雄　1992「山陰・隠岐地域」『弥生土器の様式と編年 -山陽・山陰編－』木耳社

鹿島町教育委員会　1992『講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書５　南講武草田遺跡』

(2) 古墳時代の土師器

古墳時代前期から中期にかけては、草田編年と松山智弘氏の編年を主に用いた。また、後期については、共伴する須恵器の年代に拠った。

花谷めぐむ　1987「山陰古式土師器の型式学的研究－島根県内の資料を中心にして -」『島根考古学会誌』第４集　島根考古学会

鹿島町教育委員会　1992『講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書５　南講武草田遺跡』

松山智弘　1991「出雲における古墳時代前半期の土器の様相－大東式の再検討－」『島根考古学会誌』第８集　島根考古学会

松山智弘　2000「小谷式の再検討－出雲平野における新資料から -」『島根考古学会誌』第17集　島根考古学会

(3) 須　恵　器

須恵器編年は大谷晃二氏の編年に拠るが、８世紀以降の年代観については、柳浦俊一氏の編年、安来市高広遺跡編年、松江市国庁跡編年を参考とした。

大谷晃二　1994「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』第11集　島根考古学会

大谷晃二　1997「出雲地方の須恵器編年表」『第７回山陰横穴墓調査検討会　出雲の横穴墓－その型式・変遷・地域性－』出雲横穴墓研究会

柳浦俊一　1980「出雲地方における歴史時代須恵器の編年試論」『松江考古』第３号　松江考古学談話会

島根県教育委員会　1984『高広遺跡発掘調査報告書－和田団地造成工事に伴う発掘調査－』

松江市教育委員会　1971　『出雲国庁跡発掘調査概報』

(4) 製 塩 土 器

製塩土器は、飛田恵美子氏の分類を参考にした。

飛田恵美子　2002「山陰地方における製塩土器について」『出雲古代史研究』第12号　出雲古代史研究会

(5) 中世土師質土器

土師質土器は、出雲平野の当該期の遺跡である出雲市蔵小路西遺跡と出雲市古志本郷遺跡の編年などを参考にした。

島根県教育委員会　1999『蔵小路西遺跡　一般国道９号出雲バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書２』

島根県教育委員会　1999『斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ　古志本郷遺跡Ⅰ』

中世土器研究会　1995『概説　中世の土器・陶磁器』真陽社

八峠　興　2001「柱状高台考」『中世土器研究論集－中世土器研究会20周年記念論集－』中世土器研究会

(6) 陶　磁　器

陶磁器は、九州近世陶磁学会の分類などを参考にした。

中世土器研究会　1995『概説　中世の土器・陶磁器』真陽社

九州近世陶磁学会　2000『九州陶磁の編年－九州近世陶磁学会10周年記念－』

横田賢次郎・森出勉　1978「大宰府出土の輸入陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』４　九州歴史資料館

森田勉　1982「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』No.2　貿易陶磁研究会

国立歴史民俗博物館　1993『日本出土の貿易陶磁』

(7) 銭　　貨

銭貨は、永井久美男氏の分類を参考にした。

永井久美男　1994『中世の出土銭－出土銭の調査と分類－』兵庫埋蔵銭調査会

永井久美男　1996『日本出土銭総覧　1996年版』兵庫埋蔵銭調査会

目　次

第1章　位置と環境 ……（露梨靖子） 1
第1節　地理・地質的環境 …… 1
第2節　歴史的環境 …… 3

第2章　調査に至る経緯と経過
第1節　調査に至る経緯の概要 ……（加村健悟） 13
第2節　調査の経過 ……（石原　聡） 13
第3節　指導委員会 …… 14
第4節　報道発表 …… 14
第5節　調査日誌抄 ……（露梨靖子） 17
第6節　過去の調査の概要 ……（景山真二） 23
1．防災工事に伴う調査 …… 24
2．拝殿建設に伴う調査 …… 34

第3章　発掘調査の概要 ……（石原　聡） 75

第4章　地下祭礼準備室建設に伴う調査 ……（景山真二） 77

第5章　八足門前の調査①（近世以降の遺構） ……（石原　聡） 113
第1節　八足門前の土層について …… 113
第2節　上面遺構（寛文度） …… 122
第3節　慶長度本殿遺構 …… 125

第6章　八足門前の調査②（大型本殿遺構） ……（石原　聡） 133
第1節　柱の位置・名称について …… 133
第2節　建物の規模・方位について …… 133
第3節　宇豆柱の調査 …… 138
第4節　心御柱の調査 …… 170
第5節　南東側柱の調査 …… 212
第6節　大型本殿遺構の年代について …… 224

第７章　彰古館北の調査 ……（石原　聡） 227
第１節　調査区の位置 …… 227
第２節　調査の目的 …… 227
第３節　各層位について …… 231
第４節　検出遺構 …… 258
第５節　まとめ …… 263

第８章　拝殿南の調査 ……（石原　聡） 265
第１節　調査区の位置 …… 265
第２節　調査の目的 …… 265
第３節　各層位について …… 265
第４節　検出遺構 …… 300
第５節　まとめ …… 322

第９章　考古学的所見のまとめ ……（松尾充晶） 325
第１節　弥生時代以前の様相 ～遺跡の萌芽期～ …… 325
第２節　古墳時代の様相 ～祭祀行為の初現期～ …… 329
第３節　飛鳥・奈良時代の様相 ～大社創建期～ …… 330
第４節　平安時代の様相 ～高層神殿と転倒の時代～ …… 331
第５節　推定宝治度本殿遺構 ～中世最後の正殿造営～ …… 332
第６節　中世の様相 ～本殿縮小期～ …… 334
第７節　戦国末期～近世初頭の様相 ～仏教建築混在期～ …… 335
第８節　近世以降の様相 ～現境内景観の確立期～ …… 335
第９節　小　結 …… 336

—・—・—　分　析　編　—・—・—

第10章　分析編の内容と概要 ……（石原　聡） 337

第11章　心御柱南西柱材下方出土の礎盤の年輪年代 ……（光谷拓実） 339

第12章　出雲大社境内遺跡より出土した本殿柱材の年代測定結果について
……（今村峯雄・坂本稔・中村俊夫・丹生越子） 341

第13章　宇豆柱の直下に敷かれていた葉片のC14年代測定 …（中村俊夫） 349

第14章　心御柱の残存に影響を与えた地中環境について
……（小口千明・朽津信明） 353

第15章　地質コア分析結果と周辺の環境変遷に関する考察
……（高安克己） 359

第16章　出雲大社近辺の古植生 ……（渡辺正巳） 379

第17章　心御柱発掘坑における微粒炭分析 ……（小椋純一） 385

第18章　出土木質遺物の樹種 ……（渡辺正巳・古野毅） 391

第19章　赤色顔料 ……（朽津信明・北野信彦） 399

第20章　柱穴内に充填された礫 ……（落合俊夫・櫻井剛・藤井宏和） 405

第21章　X線CTによる鉄器の非破壊評価
……（本田　卓・山口新吾・吉川英樹・上野健一・油井三和） 413

第22章　巨大柱の３次元計測について ……（塚本敏夫） 431

―・―・― 考　察　編 ―・―・―

第23章　鎌倉初期出雲大社本殿跡の復元 ……（浅川滋男） 439

第24章　遺構から復元される本殿の上屋構造 ……（藤澤　彰） 469

第25章　神道考古学から見た古代の大社 ……（椙山林継） 483

第26章　文献史料から見た宝治２年の杵築大社造営 ……（井上寛司） 495

第27章　発掘調査の総括 ……（渡邊貞幸） 507

挿 図 目 次

第1図　島根県の位置（S＝1/8,000,000）…… 2
第2図　大社町の位置（S＝1/1,000,000）…… 2
第3図　周辺の遺跡（S＝1/100,000）…… 12
第4図　新聞掲載記事 …… 16
第5図　出雲大社境内と既往の工事・調査地点（S＝1/2,000）…… 25
第6図　遺構位置図(拝殿建設時～拝殿南、S＝1/400）…… 26
第7図　地下貯水タンク建設に伴う層序関係 …… 28
第8図　地下貯水タンク建設に伴う出土遺物実測図(1)（S＝1/3）…… 29
第9図　地下貯水タンク建設に伴う出土遺物実測図(2)（S＝1/3）…… 30
第10図　地下貯水タンク建設に伴う出土遺物実測図(3)（S＝1/3）…… 31
第11図　拝殿建設時(昭和32・33年)の基本層序模式図 …… 36
第12図　境内施設建設に伴う出土遺物実測図(1)（S＝1/3）…… 37
第13図　境内施設建設に伴う出土遺物実測図(2)（S＝1/3）…… 38
第14図　境内施設建設に伴う出土遺物実測図(3)（S＝1/3）…… 39
第15図　境内施設建設に伴う出土遺物実測図(4)（S＝1/3）…… 40
第16図　境内施設建設に伴う出土遺物実測図(5)（S＝1/3）…… 41
第17図　境内施設建設に伴う出土遺物実測図(6)（S＝1/3）…… 42
第18図　境内施設建設に伴う出土遺物実測図(7)（S＝1/3）…… 43
第19図　境内施設建設に伴う出土遺物実測図(8)（S＝1/3）…… 44
第20図　境内施設建設に伴う出土遺物実測図(9)（S＝1/3）…… 45
第21図　境内施設建設に伴う出土遺物実測図(10)（S＝1/3）…… 46
第22図　延享度造営拝殿遺構全体図（S＝1/200）…… 60
第23図　延享度造営拝殿遺構実測図(1)（S＝1/80）…… 61
第24図　延享度造営拝殿遺構実測図(2)（S＝1/80）…… 62
第25図　拝殿地下調査遺構全体図（S＝1/200）…… 64
第26図　拝殿地下調査（天正度～慶長度）溝跡平面図(S＝1/100）…… 65
第27図　拝殿地下調査（中世末～近世初頭）遺構図(1)（S＝1/100）…… 66
第28図　拝殿地下調査（中世末～近世初頭）遺構図(2)（S＝1/100）…… 67
第29図　拝殿地下調査（14～16世紀頃）建物遺構図（S＝1/100）…… 68
第30図　調査区の位置 …… 76
第31図　平成11年度調査区土層図（横軸S＝1/180　縦軸S＝1/60）…… 79
第32図　平成11年度調査区全体図（S＝1/200）…… 80
第33図　平成11年度調査区　包含層出土遺物実測図(1)（S＝1/3）…… 81
第34図　平成11年度調査区　包含層出土遺物実測図(2)（遺物はS＝1/3、銭貨は実大）…… 82
第35図　平成11年度調査区　出土遺物実測図(3)（S＝1/3）…… 82
第36図　平成11年度調査区　石列平面図・断面図（S＝1/60）…… 83
第37図　平成11年度調査区　土坑断面図（P1～P21はS＝1/20　P22は1/40）…… 89

第38図　平成11年度調査区　慶長度階段跡遺構面平面図・断面図（S＝1/50）…… 90
第39図　平成11年度調査区　中世本殿遺構礎盤平面図・立面図（S＝1/20）…… 91
第40図　平成11年度調査区　中世掘立柱柵列断面図（S＝1/60）…… 94
第41図　平成11年度調査区　中世掘立柱柵列柱根実測図(1)
（番号は第40図に対応　S＝1/6）…… 96
第42図　平成11年度調査区　中世掘立柱柵列柱根実測図(2)
（番号は第40図に対応　S＝1/6）…… 97
第43図　平成11年度調査区　中世掘立柱柵列柱根実測図(3)
（番号は第40図に対応　S＝1/6）…… 98
第44図　平成11年度調査区　中世掘立柱柵列柱根実測図(4)
（番号は第40図に対応　S＝1/6）…… 99
第45図　平成11年度調査区　中世掘立柱柵列柱根実測図(5)
（番号は第40図に対応　S＝1/6）…… 100
第46図　平成11年度調査区　古墳時代前期遺構平面図（S＝1/60）・土層図（S＝1/30）…… 102
第47図　平成11年度調査区　古墳時代前期遺構出土遺物実測図(1)（S＝1/3）…… 103
第48図　平成11年度調査区　古墳時代前期遺構出土遺物実測図(2)（S＝1/3）…… 104
第49図　平成11年度調査区　古墳時代前期遺構出土遺物実測図(3)（S＝1/3）…… 105
第50図　平成11年度調査区　古墳時代前期遺構出土遺物実測図(4)（S＝1/3）…… 106
第51図　平成11年度調査区　古墳時代前期遺構出土遺物実測図(5)
（1～23はS＝1/3　24はS＝1/6）…… 107
第52図　平成11年度調査区　古墳時代前期遺構出土遺物実測図(6)
（1～14は実大、15は1/3）…… 108
第53図　八足門前調査区　基本層序 …… 114
第54図　八足門前調査区　出土遺物実測図(1)（S＝1/3）…… 114
第55図　八足門前調査区　出土遺物実測図(2)（S＝1/3）…… 119
第56図　八足門前調査区　出土遺物（S＝1/3）…… 122
第57図　八足門前調査区　SK01遺構平面図・土層図（S＝1/40）…… 123
第58図　八足門前調査区　遺構検出位置（S＝1/400）…… 123
第59図　八足門前調査区　慶長度遺構面　平面図（S＝1/100）…… 127
第60図　八足門前調査区　慶長度本殿位置想定図（S＝1/200）…… 128
第61図　八足門前調査区　慶長度遺構面見通し図（S＝1/150）…… 128
第62図　八足門前調査区　慶長度遺構面　1号柱跡平面図・土層図（S＝1/40）…… 129
第63図　八足門前調査区　慶長度遺構面　2号柱跡平面図・土層図（S＝1/40）…… 129
第64図　柱跡間の距離 …… 133
第65図　八足門前調査区　巨大本殿遺構検出面平面図（S＝1/100）…… 134
第66図　八足門前調査区　宇豆柱　出土状況平面図（S＝1/40）…… 140
第67図　八足門前調査区　宇豆柱　底面平面図（S＝1/40）…… 141
第68図　八足門前調査区　宇豆柱　土層図（S＝1/40）…… 142
第69図　八足門前調査区　宇豆柱（北東柱材）　3次元計測図（S＝1/60）…… 148
第70図　八足門前調査区　宇豆柱（北西柱材）　3次元計測図（S＝1/60）…… 149

第71図　八足門前調査区　宇豆柱（南柱材）　3次元計測図（S＝1/60）…… 150
第72図　八足門前調査区　宇豆柱上面出土遺物実測図(1)（S＝1/3）…… 162
第73図　八足門前調査区　宇豆柱上面出土遺物実測図(2)（S＝1/3）…… 163
第74図　八足門前調査区　宇豆柱掘り方内出土遺物実測図（S＝1/3）…… 164
第75図　八足門前調査区　心御柱出土状況平面図（S＝1/40）…… 171
第76図　八足門前調査区　心御柱　土層図（S＝1/40）…… 172
第77図　八足門前調査区　心御柱　底面平面図（S＝1/40）…… 173
第78図　八足門前調査区　心御柱　底面平面図（S＝1/40）…… 174
第79図　八足門前調査区　心御柱　底面平面図（S＝1/40）…… 175
第80図　八足門前調査区　心御柱平面図（S＝1/80）…… 177
第81図　八足門前調査区　心御柱平面図（礫重量分類図）（S＝1/80）…… 179
第82図　八足門前調査区　心御柱平面図（礫石材分類図）（S＝1/80）…… 181
第83図　八足門前調査区　心御柱　遺構の切り合い関係（S＝1/80）…… 187
第84図　八足門前調査区　心御柱（南東柱材）　3次元計測図（S＝1/60）…… 190
第85図　八足門前調査区　心御柱（北柱材）　3次元計測図（S＝1/60）…… 191
第86図　八足門前調査区　心御柱（南西柱材）　3次元計測図（S＝1/60）…… 192
第87図　八足門前調査区　心御柱上面出土遺物実測図(1)（S＝1/3）…… 204
第88図　八足門前調査区　心御柱上面出土遺物実測図(2)（S＝1/3）…… 205
第89図　八足門前調査区　心御柱掘り方内出土遺物実測図（S＝1/3）…… 207
第90図　八足門前調査区　心御柱直下出土板材実測図（S＝1/6）…… 209
第91図　八足門前調査区　南東側柱出土状況平面図（S＝1/40）…… 213
第92図　八足門前調査区　南東側柱土層図（S＝1/40）…… 214
第93図　八足門前調査区　南東側柱上面出土遺物実測図(1)（S＝1/3）…… 218
第94図　八足門前調査区　南東側柱上面出土遺物実測図(2)（S＝1/3）…… 219
第95図　八足門前調査区　南東側柱上面出土遺物実測図(3)（S＝1/3）…… 220
第96図　彰古館北調査区　位置図（S＝1/500）…… 228
第97図　彰古館北調査区　土層図（S＝1/100）…… 229
第98図　彰古館北調査区　表土～1層上面出土遺物実測図（S＝1/3）…… 232
第99図　彰古館北調査区　表土～1層上面出土銭貨拓影図（S＝1/1）…… 237
第100図　彰古館北調査区　1面下層出土遺物実測図（S＝1/3）…… 240
第101図　彰古館北調査区　1面下層出土銭貨拓影図（S＝1/1）…… 240
第102図　彰古館北調査区　2面下層出土遺物実測図（S＝1/3）…… 243
第103図　彰古館北調査区　3面下層出土遺物実測図（23:S＝1/6、それ以外S＝1/3）…… 247
第104図　彰古館北調査区　4面下層出土遺物実測図（S＝1/3）…… 250
第105図　彰古館北調査区　5面下層出土遺物実測図（S＝1/3）…… 250
第106図　彰古館北調査区　遺構面平面図(1)（S＝1/100）…… 254
第107図　彰古館北調査区　遺構面平面図(2)（S＝1/100）…… 255
第108図　彰古館北調査区　SX01出土遺物実測図（S＝1/3）…… 259
第109図　彰古館北調査区　SK01遺構平面図・土層図（S＝1/20）…… 261
第110図　彰古館北調査区　SK02遺構平面図・土層図（S＝1/20）…… 261

第111図　彰古館北調査区　SK01出土遺物実測図（S＝1/3）…… 263
第112図　彰古館北調査区　SK02出土遺物実測図（S＝1/3）…… 263
第113図　拝殿南調査区　土層図（S＝1/80）…… 266
第114図　拝殿南調査区　1層出土遺物実測図（S＝1/3）…… 267
第115図　拝殿南調査区　1層出土銭貨拓影図（S＝1/1）…… 267
第116図　拝殿南調査区　2層出土遺物実測図（S＝1/3）…… 269
第117図　拝殿南調査区　3層出土遺物実測図（S＝1/3）…… 270
第118図　拝殿南調査区　4層出土遺物実測図（S＝1/3）…… 270
第119図　拝殿南調査区　4層出土銭貨拓影図（S＝1/1）…… 270
第120図　拝殿南調査区　5層出土遺物実測図（S＝1/3）…… 271
第121図　拝殿南調査区　6層出土銭貨拓影図（S＝1/1）…… 272
第122図　拝殿南調査区　6層出土遺物実測図（S＝1/3）…… 273
第123図　拝殿南調査区　7層出土遺物実測図（S＝1/3）…… 277
第124図　拝殿南調査区　8層出土遺物実測図(1)（S＝1/3）…… 281
第125図　拝殿南調査区　8層出土遺物実測図(2)（S＝1/3）…… 283
第126図　拝殿南調査区　9層出土遺物実測図（S＝1/3）…… 285
第127図　拝殿南調査区　10層出土遺物実測図（S＝1/3）…… 288
第128図　拝殿南調査区　11層出土遺物実測図(1)（S＝1/3）…… 293
第129図　拝殿南調査区　11層出土遺物実測図(2)（S＝1/3）…… 294
第130図　拝殿南調査区　出土量グラフ …… 297
第131図　拝殿南調査区　遺構面平面図(1)（S＝1/100）…… 298
第132図　拝殿南調査区　遺構面平面図(2)（S＝1/100）…… 299
第133図　拝殿南調査区　2層上面平面図（S＝1/40）…… 302
第134図　『紙本著色粋築大社近郷絵図』にみえる御供所 …… 303
第135図　拝殿南調査区　SB01遺構平面図・土層図（S＝1/60）…… 304
第136図　拝殿南調査区　8層上面平面図（S＝1/40）…… 308
第137図　拝殿南調査区　8層上面検出遺構平面図・土層図（S＝1/20）…… 308
第138図　拝殿南調査区　9層上面平面図（S＝1/40）…… 310
第139図　拝殿南調査区　9層上面検出遺構平面図・土層図（S＝1/20）…… 310
第140図　拝殿南調査区　SD02遺構平面図・土層図（S＝1/30）…… 314
第141図　拝殿南調査区　SD02遺構出土遺物実測図(1)（S＝1/3）…… 315
第142図　拝殿南調査区　SD02遺構出土遺物実測図(2)（S＝1/3）…… 316
第143図　出雲大社境内遺跡の基本網序模式図 …… 327
第144図　確認された本殿の位置 …… 333
第145図　出雲大社境内遺跡出土礎盤の年輪年代調査結果 …… 340
第146図　出雲大社境内遺跡出土宇豆柱（南材）の伐採年代の推定値 …… 345
第147図　宇豆柱（南材）の測定結果と炭素14年代国際較正標準曲線との比較 …… 345
第148図　出雲大社境内遺跡出土心御柱（北材）の最外年輪層の年代の推定値 …… 346
第149図　心御柱（北材）の測定結果と炭素14年代国際較正標準曲線との比較 …… 346
第150図　宇豆柱直下に敷かれていた木の葉の14C年代と較正暦年代 …… 351

第151図　粒度分析結果 …… 356
第152図　X線分析顕微鏡による元素濃度マッピング …… 357
第153図　SEM－EDSによる元素濃度マッピング …… 357
第154図　ボーリング位置図と出雲平野北西部地形概略図 …… 370
第155図　コアTS01の分析結果（a 粒度組成、含水比、帯磁率） …… 371
第156図　コアTS01の分析結果（b 強熱減量、全有機炭素量（TOC）・
全窒素量（TN）・全硫黄量（TS）） …… 371
第157図　コアTS02の分析結果（a 粒度組成、含水比、帯磁率） …… 372
第158図　コアTS02の分析結果（b 強熱減量、全有機炭素量（TOC）・
全窒素量（TN）・全硫黄量（TS）） …… 372
第159図　コアTS03の分析結果（a 粒度組成、含水比、帯磁率） …… 373
第160図　コアTS03の分析結果（b 強熱減量、全有機炭素量（TOC）・
全窒素量（TN）・全硫黄量（TS）） …… 373
第161図　出雲地方の後氷期海水準変動曲線と堆積過程との関係を示す模式図 …… 374
第162図　コアTS01、TS02、TS03の堆積過程と海水準変動との関係 …… 375
第163図　出雲平野西部のボーリングコアの年代と環境の対比 …… 375
第164図　コアTS01の切断面写真、軟X線写真および肉眼観察記載 …… 376
第165図　コアTS02の切断面写真、軟X線写真および肉眼観察記載 …… 377
第166図　コアTS03の切断面写真、軟X線写真および肉眼観察記載 …… 378
第167図　試料採取地点 …… 383
第168図　ST01の花粉ダイアグラム …… 383
第169図　ST02の花粉ダイアグラム …… 384
第170図　ST03の花粉ダイアグラム …… 384
第171図　各試料の可視光反射スペクトル …… 402
第172図　南側宇豆柱試料の元素分析結果 …… 402
第173図　南側宇豆柱試料の鉱物分析結果 …… 402
第174図　出雲大社周辺の地質 …… 408
第175図　ルートマップ …… 409
第176図　X線CT装置の構成と仕様 …… 416
第177図　レーザー三次元計測装置の構成と仕様 …… 416
第178図　釿（資料No.1）のX線CT撮像結果 …… 417
第179図　釿（資料No.2）のX線CT撮像結果 …… 418
第180図　釿の三次元点群 …… 419
第181図　鉄釘（資料No.3）のX線CT撮像結果 …… 420
第182図　鉄釘（資料No.4）のX線CT撮像結果 …… 420
第183図　鉄釘（資料No.4）のX線CT像における物質密度と画素数の関係 …… 421
第184図　鉄釘（資料No.4）のX線CT像のラインプロファイルによる物質密度の分布 …… 421
第185図　鉄釘（資料No.5）のX線CT撮像結果 …… 422
第186図　鉄釘（資料No.6）のX線CT撮像結果 …… 423
第187図　鉄釘（資料No.6）のX線CT像における物質密度と画素数の関係 …… 423

第188図　鉄釘（資料№７）のX線CT撮像結果 …… 424
第189図　X線CT像から推定される鉄釘資料の原形状 …… 425
第190図　鉄釘（資料№８）のX線CT撮像結果 …… 426
第191図　鉄釘（資料№９）のX線CT撮像結果 …… 427
第192図　鉄釘（資料№10）のX線CT撮像結果 …… 428
第193図　X線CT像から推定される鉄帯資料の原形状 …… 429
第194図　出雲大社境内遺跡の距離画像 …… 433
第195図　宇豆柱の出土状況の距離画像 …… 433
第196図　距離画像の差分表示 …… 433
第197図　心御柱のリアルタイム計測結果
（上より、①雛撤去前②雛撤去後③１本取上げ後④２本取上げ後） …… 434
第198図　心御柱のシェーディング図　上：側面　下：底面 …… 435
第199図　加工痕の詳細図（心御柱） …… 436
第200図　宇豆柱の埋設状況俯瞰図（北東方向） …… 436
第201図　心御柱の埋設状況俯瞰図（北東方向） …… 437
第202図　「金輪御造営差図」のトレース …… 440
第203図　『玉勝間』所載の金輪造営図トレース …… 441
第204図　宇豆柱の出土状況：平面図遺構図 …… 444
第205図　心柱の出土状況：平面図遺構図 …… 445
第206図　南東側柱の出土状況：平面図遺構図 …… 446
第207図　桁行総長74尺、梁行総長70尺の場合の復元平面図（当初案） …… 449
第208図　神郷図に描く出雲大社本殿のトレース …… 451
第209図　当初案（床上）の復元図［a 梁行断面図・b 桁行断面図・c 屋根見上げ図］ …… 454
第210図　修正第１案（床上）の桁行断面図 …… 457
第211図　修正第２案（床上）の復元図［a 平面図・b 桁行断面図・c 側面図］ …… 457
第212図　B案を例にとってみた10丈の材の使い方 …… 460
第213図　A案・B案・C案の正面図比較 …… 461
第214図　神郷図と同じアングルからみたA案 …… 461
第215図　神郷図と同じアングルからみたC案 …… 462
第216図　神郷図と同じアングルからみたB案 …… 463
第217図　床上を修正第１案とした場合のB案 …… 464
第218図　床上を修正第２案とした場合のB案 …… 465
第219図　遺構検出面の柱配置 …… 470
第220図　「出雲杵築社遷宮神宝注記」による調度の部位と寸法 …… 471
第221図　遺構検出面と床面の柱配置 …… 472
第222図　金輪御造営差図（千家家所蔵）読み取り図 …… 474
第223図　復元図 …… 479
第224図　子ノ神遺跡出土家形土器復元図 …… 492
第225図　稲吉角田出土土器に描かれた高殿 …… 493
第226図　唐古・鍵遺跡出土土器の絵画２例 …… 493

表 目 次

表1　周辺の遺跡 -覧 …… 11
表2　調査と報道の動き …… 15
表3　主要な工事・発掘調査 …… 23
表4　境内施設建設に伴う出土遺物 …… 24
表5　拝殿地下調査区　陶磁器破片点数集計表 …… 59
表6　平成11年度調査区　出土遺物（銭貨）観察表 …… 82
表7　平成11年度調査区　出土遺物（勾玉）観察表 …… 108
表8　平成11年度調査区　出土遺物（臼玉）観察表 …… 108
表9　八足門前調査区　出土遺物（土器）観察表① …… 115
表10　八足門前調査区　出土遺物（鉄製品）観察表 …… 115
表11　八足門前調査区　出土遺物（瓦）観察表 …… 115
表12　八足門前調査区　出土遺物 陶磁器（番号は写真59に対応） …… 115
表13　八足門前調査区　出土遺物（土器）観察表② …… 120
表14　八足門前調査区　ＳＫ０１遺構出土遺物観察表 …… 122
表15　八足門前調査区　宇豆柱基本データ …… 147
表16　八足門前調査区　宇豆柱上面　出土遺物（土器）観察表 …… 165
表17　八足門前調査区　宇豆柱上面　出土遺物（鉄製品）観察表 …… 165
表18　八足門前調査区　宇豆柱柱穴内　出土遺物（土器）観察表 …… 165
表19　八足門前調査区　宇豆柱柱穴内　出土遺物（鉄製品）観察表 …… 165
表20　八足門前調査区　心御柱基本データ …… 189
表21　八足門前調査区　心御柱上面　出土遺物（鉄製品）観察表 …… 203
表22　八足門前調査区　心御柱柱穴内　出土遺物（土器）観察表 …… 207
表23　八足門前調査区　心御柱柱穴内　出土遺物（鉄製品）観察表 …… 207
表24　八足門前調査区　南東側柱上面　出土遺物（土器）観察表 …… 217
表25　八足門前調査区　南東側柱上面　出土遺物（鉄製品）観察表 …… 223
表26　大型本殿の年代 …… 225
表27　彰古館北調査区　表土～１面上　出土遺物（土器）観察表 …… 231
表28　彰古館北調査区　表土～１面上　出土遺物（鉄・銅製品）観察表 …… 231
表29　彰古館北調査区　表土～１面上　出土遺物（銭貨）観察表 …… 237
表30　彰古館北調査区　１面下層　出土遺物（土器）観察表 …… 239
表31　彰古館北調査区　１面下層　出土遺物（鉄製品・鉄滓）観察表 …… 239
表32　彰古館北調査区　１面下層　出土遺物（銭貨）観察表 …… 239
表33　彰古館北調査区　２面下層　出土遺物（土器）観察表 …… 243
表34　彰古館北調査区　３面下層　出土遺物（土器）観察表 …… 246
表35　彰古館北調査区　３面下層　出土遺物（瓦）観察表 …… 248
表36　彰古館北調査区　４面下層　出土遺物（土器）観察表 …… 251
表37　彰古館北調査区　５面下層　出土遺物（縄文土器）観察表 …… 253
表38　彰古館北調査区　土師質土器・陶磁器集計表 …… 253
表39　彰古館北調査区　ＳＸ０１遺構出土遺物（土器）観察表 …… 259
表40　彰古館北調査区　ＳＫ０１遺構出土遺物（土器）観察表 …… 263
表41　彰古館北調査区　ＳＫ０１遺構出土遺物（鉄製品）観察表 …… 264

表42　彰古館北調査区　ＳＫ０２遺構出土遺物（土器）観察表 …… 264
表43　彰古館北調査区　ＳＫ０２遺構出土遺物（鉄製品）観察表 …… 264
表44　拝殿南調査区　１層出土遺物（土器）観察表 …… 267
表45　拝殿南調査区　１層出土遺物（銭貨）観察表 …… 267
表46　拝殿南調査区　２層出土遺物（土器）観察表 …… 269
表47　拝殿南調査区　２層出土遺物（鉄製品）観察表 …… 269
表48　拝殿南調査区　３層出土遺物（鉄製品）観察表 …… 270
表49　拝殿南調査区　４層出土遺物（土器）観察表 …… 270
表50　拝殿南調査区　４層出土遺物（銭貨）観察表 …… 271
表51　拝殿南調査区　５層出土遺物（鉄製品）観察表 …… 271
表52　拝殿南調査区　６層出土遺物（銭貨）観察表 …… 272
表53　拝殿南調査区　６層出土遺物（土器）観察表 …… 274
表54　拝殿南調査区　７層出土遺物（土器）観察表 …… 278
表55　拝殿南調査区　８層出土遺物（土錘）観察表① …… 279
表56　拝殿南調査区　８層出土遺物（土器）観察表② …… 280
表57　拝殿南調査区　８層出土遺物（鉄製品）観察表 …… 280
表58　拝殿南調査区　９層出土遺物（土器）観察表 …… 284
表59　拝殿南調査区　９層出土遺物（鉄製品）観察表 …… 286
表60　拝殿南調査区　10層出土遺物（土器）観察表 …… 289
表61　拝殿南調査区　10層出土遺物（土製品）観察表 …… 289
表62　拝殿南調査区　11層出土遺物（土器）観察表① …… 290
表63　拝殿南調査区　11層出土遺物（土錘）観察表② …… 291
表64　拝殿南調査区　11層出土遺物（土器）観察表③ …… 292
表65　拝殿南調査区　11層出土遺物（土製品）観察表 …… 292
表66　拝殿南調査区　陶磁器（番号は、写真219と対応） …… 296
表67　拝殿南調査区　土師質土器・陶磁器集計表 …… 296
表68　拝殿南調査区　ＳＤ０２遺構出土遺物（土器）観察表① …… 317
表69　拝殿南調査区　ＳＤ０２遺構出土遺物（土器）観察表② …… 318
表70　拝殿南調査区　ＳＤ０２遺構出土遺物（土製品）観察表 …… 318
表71　出雲大社境内遺跡出土宇豆柱（南材）の炭素14年代測定結果（名古屋大学） …… 347
表72　出雲大社境内遺跡出土宇豆柱（柱材コア試料）の
　　炭素14年代測定結果（ベータアナリティック社） …… 347
表73　出雲大社境内遺跡出土心御柱（北材）の炭素14年代測定結果（名古屋大学） …… 348
表74　出雲大社境内遺跡の宇豆柱直下から採取された木の葉試料の14C年代と較正年代 …… 352
表75　土壌試料の主要鉱物および化学組成 …… 355
表76　ボーリングコア一覧 …… 370
表77　AMS放射性炭素年代測定結果 …… 378
表78　花粉帯と化学分析ステージの関係 …… 382
表79　各試料に含まれる微粒炭のタイプ別割合（数字は%） …… 386
表80　樹種同定結果 …… 397
表81　分析結果一覧 …… 404
表82　出雲地域の地質総括表 …… 408
表83　鉄器一覧 …… 416
表84　延享造営伝にみる部材寸法と復原寸法 …… 450

写 真 目 次

写真1　大社町全景（南東上空より）…… 1
写真2　出雲大社境内（南上空より）…… 1
写真3　公開発掘の様子…… 14
写真4　発掘調査指導委員会…… 14
写真5　調査前の境内…… 17
写真6　平成11年度の発掘調査の様子…… 17
写真7　平成11年度の調査指導の様子…… 17
写真8　平成12年度４月28日報道発表（大型本殿遺構）…… 20
写真9　平成12年度一般公開…… 20
写真10　平成12年度報道発表（心御柱）…… 20
写真11　平成13年度調査時の境内…… 22
写真12　平成13年度発掘調査の様子…… 22
写真13　平成14年度の調査指導の様子…… 22
写真14　地下貯水タンク建設に伴う出土遺物(1)（番号は第８図と対応）…… 32
写真15　地下貯水タンク建設に伴う出土遺物(2)（番号は第９図と対応）…… 33
写真16　地下貯水タンク建設に伴う出土遺物(3)（番号は第10図と対応）…… 33
写真17　拝殿建設時調査状況(1)…… 35
写真18　境内施設建設に伴う出土遺物(1)…… 47
写真19　境内施設建設に伴う出土遺物(2)…… 48
写真20　境内施設建設に伴う出土遺物(3)…… 49
写真21　境内施設建設に伴う出土遺物(4)…… 50
写真22　境内施設建設に伴う出土遺物(5)（番号は第18図に対応）…… 51
写真23　境内施設建設に伴う出土遺物(6)（番号は第19図に対応）…… 52
写真24　境内施設建設に伴う出土遺物(7)（番号は第20図に対応）…… 53
写真25　境内施設建設に伴う出土遺物(8)（番号は第21図に対応）…… 54
写真26　拝殿建設に伴う出土遺物(1)（白磁）…… 55
写真27　拝殿建設に伴う出土遺物(2)（青磁）…… 55
写真28　拝殿建設に伴う出土遺物(3)（青花）…… 56
写真29　拝殿建設に伴う出土遺物(4)（肥前系磁器）…… 56
写真30　拝殿建設に伴う出土遺物(5)（肥前系陶器）…… 57
写真31　拝殿建設に伴う出土遺物(6)（窯器系陶器）…… 57
写真32　拝殿建設に伴う出土遺物(7)（備前系陶器）…… 58
写真33　拝殿建設に伴う出土遺物(8)（肥前系陶器）…… 58
写真34　拝殿建設に伴う出土遺物(9)（その他陶器）…… 59
写真35　拝殿建設に伴う調査状況(2)…… 63
写真36　拝殿建設に伴う調査状況(3)…… 70
写真37　拝殿建設に伴う出土柱根(1)…… 71

写真38　拝殿建設に伴う出土柱根(2) …… 72
写真39　拝殿建設に伴う出土柱根(3) …… 73
写真40　平成11年度調査区全景 …… 77
写真41　平成11年度出土遺物(1) …… 82
写真42　平成11年度出土遺物(2)（番号は第33図に対応） …… 84
写真43　平成11年度出土遺物(3)（番号は第33図に対応） …… 84
写真44　平成11年度出土遺物(4)（番号は第33図に対応） …… 85
写真45　平成11年度出土遺物(5)（番号は第34図に対応） …… 85
写真46　平成11年度出土遺物(6)（番号は第33図に対応） …… 86
写真47　平成11年度出土遺物(7)（番号は第34図に対応） …… 87
写真48　石列検出状況（南から） …… 92
写真49　慶長度本殿階段跡礎石検出状況（西から） …… 92
写真50　慶長度本殿階段跡基壇石列検出状況（北から） …… 93
写真51　中世本殿遺構礎盤検出状況（東から） …… 93
写真52　中世柵列柱根(1)（中央から東へ） …… 95
写真53　中世柵列柱根(2)（西から） …… 95
写真54　古墳時代前期遺構面検出状況（北西から） …… 101
写真55　平成11年度調査区　古墳時代前期遺構出土遺物(1) …… 109
写真56　平成11年度調査区　古墳時代前期遺構出土遺物(2) …… 110
写真57　平成11年度調査区　古墳時代前期遺構出土遺物(3) …… 111
写真58　平成11年度調査区　古墳時代前期遺構出土遺物(4) …… 112
写真59　八足門前調査区　陶磁器（番号は表12と対応） …… 116
写真60　八足門前調査区　表土（番号は第54図と対応） …… 117
写真61　八足門前調査区　寛文造成土　土器（番号は第54図と対応） …… 117
写真62　八足門前調査区　寛文造成土　瓦（番号は第54図と対応） …… 118
写真63　八足門前調査区　寛文造成土　鉄製品（番号は第54図と対応） …… 118
写真64　八足門前調査区　上層レキ層　土器(1)（番号は第55図と対応） …… 120
写真65　八足門前調査区　上層レキ層　土器(2)（番号は第55図と対応） …… 121
写真66　八足門前調査区　ＳＫ０１遺構　土器（番号は第56図と対応） …… 122
写真67　八足門前調査区　ＳＫ０１遺構検出状況（北東から） …… 124
写真68　八足門前調査区　ＳＫ０１遺構半裁状況（南西から） …… 124
写真69　八足門前調査区　ＳＫ０１遺構完掘状況（南西から） …… 124
写真70　八足門前調査区　慶長度遺構面(1)（東から） …… 130
写真71　八足門前調査区　慶長度遺構面(2)（手前が１号柱跡：南西から） …… 130
写真72　八足門前調査区　１号柱跡半裁状況（北東から） …… 131
写真73　八足門前調査区　慶長度遺構面(3)（手前が２号柱跡：北東から） …… 131
写真74　八足門前調査区　２号柱跡半裁状況（南西から） …… 132
写真75　八足門前調査区　慶長度遺構面(4)（西側溝の状況） …… 132
写真76　八足門前調査区　礫集中遺構検出状況(1)（南西から） …… 135
写真77　八足門前調査区　礫集中遺構検出状況(2)（南東から） …… 135

写真78　八足門前調査区　礫集中遺構検出状況(3)（北東から）…… 136
写真79　八足門前調査区　礫集中遺構検出状況(4)（南から）…… 136
写真80　八足門前調査区　大型本殿遺構検出状況（南から）…… 137
写真81　八足門前調査区　大型本殿遺構検出状況（北西から）…… 137
写真82　八足門前調査区　宇豆柱　柱穴出土の礫 …… 138
写真83　八足門前調査区　宇豆柱　付着の赤色顔料 …… 139
写真84　八足門前調査区　宇豆柱　出土状況（南東から：柱材1本目を確認した状況）…… 143
写真85　八足門前調査区　宇豆柱　出土状況（南東から：柱材3本目が出土した状況）…… 143
写真86　八足門前調査区　宇豆柱　出土状況（東から：柱材3本目が出土した状況）…… 144
写真87　八足門前調査区　宇豆柱　出土状況（上面から：柱材3本目が出土した状況）…… 144
写真88　八足門前調査区　宇豆柱　出土状況（東から）…… 145
写真89　八足門前調査区　宇豆柱　南柱材（東から）…… 145
写真90　八足門前調査区　宇豆柱　底面木片出土状況（北西から）…… 145
写真91　八足門前調査区　宇豆柱　取上げ後の底面（南東から）…… 146
写真92　八足門前調査区　宇豆柱　底面出土鉄製品（釿）…… 146
写真93　八足門前調査区　宇豆柱　底面出土杭材 …… 146
写真94　八足門前調査区　宇豆柱　北東柱材（側面1）…… 151
写真95　八足門前調査区　宇豆柱　北東柱材（側面2）…… 151
写真96　八足門前調査区　宇豆柱　北東柱材（上面）…… 152
写真97　八足門前調査区　宇豆柱　北東柱材（下面）…… 152
写真98　八足門前調査区　宇豆柱　北東柱材（底面加工痕）…… 153
写真99　八足門前調査区　宇豆柱　北西柱材（側面1）…… 154
写真100　八足門前調査区　宇豆柱　北西柱材（側面2）…… 154
写真101　八足門前調査区　宇豆柱　北西柱材（上面）…… 155
写真102　八足門前調査区　宇豆柱　北西柱材（底面）…… 155
写真103　八足門前調査区　宇豆柱　北西柱材（加工痕）…… 156
写真104　八足門前調査区　宇豆柱　南柱材（側面1）…… 157
写真105　八足門前調査区　宇豆柱　南柱材（側面2）…… 157
写真106　八足門前調査区　宇豆柱　南柱材（側面・東方向）…… 158
写真107　八足門前調査区　宇豆柱　南柱材（側面・西方向）…… 158
写真108　八足門前調査区　宇豆柱　南柱材（上面）…… 159
写真109　八足門前調査区　宇豆柱　南柱材（底面）…… 159
写真110　八足門前調査区　宇豆柱　南柱材（加工痕）…… 160
写真111　八足門前調査区　宇豆柱　上面　土器（番号は第72図と対応）…… 166
写真112　八足門前調査区　宇豆柱　底面　土器（番号は第74図と対応）…… 166
写真113　八足門前調査区　宇豆柱　上面　鉄製品（番号は第72・73図と対応）…… 167
写真114　八足門前調査区　宇豆柱　底面　鉄製品（番号は第74図と対応）…… 167
写真115　八足門前調査区　宇豆柱　底面　釿(1)（番号は第74図と対応）…… 168
写真116　八足門前調査区　宇豆柱　底面　釿(2) …… 169
写真117　八足門前調査区　心御柱　出土状況(1)（北東から）…… 183

写真118　八足門前調査区　心御柱　出土状況(2)（南から）…… 183
写真119　八足門前調査区　心御柱　出土状況(3)（南東から）…… 184
写真120　八足門前調査区　心御柱　出土状況(4)（南西から）…… 184
写真121　八足門前調査区　心御柱　南西柱材取り上げ後（南西から）…… 185
写真122　八足門前調査区　心御柱　南西・南東柱材取り上げ後（南から）…… 185
写真123　八足門前調査区　心御柱　柱材取り上げ後（南東から）…… 185
写真124　八足門前調査区　心御柱　柱穴底面の状況…… 186
写真125　八足門前調査区　心御柱柱穴西側の溝状遺構（1段階）…… 188
写真126　八足門前調査区　心御柱　南東柱材（側面1）…… 193
写真127　八足門前調査区　心御柱　南東柱材（側面2）…… 193
写真128　八足門前調査区　心御柱　南東柱材（上面）…… 194
写真129　八足門前調査区　心御柱　南東柱材（底面）…… 194
写真130　八足門前調査区　心御柱　南東柱材（えつり穴・西側）…… 195
写真131　八足門前調査区　心御柱　南東柱材（えつり穴・南東側）…… 195
写真132　八足門前調査区　心御柱　南東柱材（底面加工痕）…… 196
写真133　八足門前調査区　心御柱　北柱材（側面1）…… 197
写真134　八足門前調査区　心御柱　北柱材（側面2）…… 197
写真135　八足門前調査区　心御柱　北柱材（側面3）…… 198
写真136　八足門前調査区　心御柱　北柱材（底面加工痕）…… 198
写真137　八足門前調査区　心御柱　北柱材（上面）…… 199
写真138　八足門前調査区　心御柱　北柱材（底面）…… 199
写真139　八足門前調査区　心御柱　南西柱材（側面1）…… 200
写真140　八足門前調査区　心御柱　南西柱材（側面2）…… 200
写真141　八足門前調査区　心御柱　南西柱材（上面）…… 201
写真142　八足門前調査区　心御柱　南西柱材（底面）…… 201
写真143　八足門前調査区　心御柱　南西柱材（底面加工痕1）…… 202
写真144　八足門前調査区　心御柱　南西柱材（底面加工痕2）…… 202
写真145　八足門前調査区　心御柱上面　鉄製品（番号は、第87・88図と対応）…… 206
写真146　八足門前調査区　心御柱上面　鉄製品赤色顔料付着部分（第88図－5）…… 206
写真147　八足門前調査区　心御柱柱穴内　土器（番号は、第89図と対応）…… 208
写真148　八足門前調査区　心御柱柱穴内　鉄製品（番号は、第89図と対応）…… 208
写真149　八足門前調査区　心御柱直下板材…… 210
写真150　八足門前調査区　心御柱直下板材（板材加工痕）…… 211
写真151　八足門前調査区　心御柱直下板材（年輪年代測定分析部分）…… 211
写真152　八足門前調査区　南東側柱出土前の状況（南東から）…… 215
写真153　八足門前調査区　南東側柱出土前の状況（北東から）…… 215
写真154　八足門前調査区　南東側柱出土状況（北から）…… 216
写真155　八足門前調査区　南東側柱出土状況（北東から）…… 216
写真156　八足門前調査区　南東側柱　土器(1)（番号は第93図と対応）…… 221
写真157　八足門前調査区　南東側柱　土器(2)（番号は第93図と対応）…… 222

写真158　八足門前調査区　南東側柱　土器使用例 …… 222
写真159　八足門前調査区　南東側柱　鉄製品（番号は第93～95図と対応） …… 223
写真160　八足門前調査区　柱状高台 …… 224
写真161　八足門前調査区　C14試料採取状況 …… 224
写真162　八足門前調査区　木の葉出土状況 …… 224
写真163　彰古館北調査区　全景（北東から） …… 227
写真164　彰古館北調査区　岩盤検出状況 …… 230
写真165　彰古館北調査区　堆積状況（東壁・西から） …… 230
写真166　彰古館北調査区　表土～1面　肥前系磁器1（皿） …… 233
写真167　彰古館北調査区　表土～1面　肥前系磁器2（碗） …… 233
写真168　彰古館北調査区　表土～1面　肥前系磁器3（瓶類、その他） …… 234
写真169　彰古館北調査区　表土～1面　肥前系陶器 …… 234
写真170　彰古館北調査区　表土～1面　国産陶器 …… 235
写真171　彰古館北調査区　表土～1面　貿易陶磁器 …… 235
写真172　彰古館北調査区　表土～1面　土師質土器（番号は第98図と対応） …… 236
写真173　彰古館北調査区　表土～1面　鉄製品（番号は第98図と対応） …… 236
写真174　彰古館北調査区　表土～1面　銭貨（番号は第99図と対応） …… 238
写真175　彰古館北調査区　1面下層　陶磁器 …… 241
写真176　彰古館北調査区　1面下層　土師質土器（番号は第100図と対応） …… 242
写真177　彰古館北調査区　1面下層　鉄製品・銭貨（番号は第100～101図と対応） …… 242
写真178　彰古館北調査区　2面下層　陶磁器 …… 244
写真179　彰古館北調査区　2面下層　土師質土器（番号は第102図と対応） …… 245
写真180　彰古館北調査区　3面下層　弥生土器（番号は第103図と対応） …… 248
写真181　彰古館北調査区　3面下層　土師質土器（番号は第103図と対応） …… 248
写真182　彰古館北調査区　3面下層　陶磁器 …… 249
写真183　彰古館北調査区　3面下層　瓦・瓦質土器（番号は第103図と対応） …… 249
写真184　彰古館北調査区　4面下層　土器（番号は第104図と対応） …… 251
写真185　彰古館北調査区　5面下層　縄文土器（番号は第105図と対応） …… 251
写真186　彰古館北調査区　5面下層の状況（北西から） …… 252
写真187　彰古館北調査区　5面下層縄文土器出土状況 …… 252
写真188　彰古館北調査区　1面検出状況（北西から） …… 256
写真189　彰古館北調査区　2面検出状況（北西から） …… 256
写真190　彰古館北調査区　3面検出状況（北西から） …… 257
写真191　彰古館北調査区　4面検出状況（東から） …… 257
写真192　彰古館北調査区　SX01遺構　遺物出土状況（西から） …… 258
写真193　彰古館北調査区　SX01遺構　土師質土器（番号は第108図と対応） …… 260
写真194　彰古館北調査区　SK01遺構　検出状況（南西から） …… 262
写真195　彰古館北調査区　SK02遺構　検出状況（南西から） …… 262
写真196　彰古館北調査区　SK01　出土遺物（番号は第111図と対応） …… 264
写真197　彰古館北調査区　SK02　出土遺物（番号は第112図と対応） …… 264

写真198　拝殿南調査区　近景 …… 265
写真199　拝殿南調査区　1層出土遺物（番号は第114図と対応） …… 268
写真200　拝殿南調査区　1層出土銭貨（番号は第115図と対応） …… 268
写真201　拝殿南調査区　2層出土遺物（番号は第116図と対応） …… 268
写真202　拝殿南調査区　2層出土鉄製品（番号は第116図と対応） …… 269
写真203　拝殿南調査区　3層出土鉄製品（番号は第117図と対応） …… 270
写真204　拝殿南調査区　4層出土遺物（番号は第118～119図と対応） …… 271
写真205　拝殿南調査区　5層出土遺物（番号は第120図と対応） …… 271
写真206　拝殿南調査区　6層出土土師質土器(1)（番号は第122図と対応） …… 274
写真207　拝殿南調査区　6層出土土師質土器(2)（番号は第122図と対応） …… 275
写真208　拝殿南調査区　6層出土銭貨（番号は第121図と対応） …… 275
写真209　拝殿南調査区　6層中礫出土状況（南から） …… 276
写真210　拝殿南調査区　6層中礫半裁状況（西から） …… 276
写真211　拝殿南調査区　7層出土土師質土器（番号は第123図と対応） …… 278
写真212　拝殿南調査区　8層出土土師質土器(1)（番号は第124図と対応） …… 282
写真213　拝殿南調査区　8層出土土師質土器(2)・鉄製品（番号は第125図と対応） …… 283
写真214　拝殿南調査区　9層出土遺物（番号は第126図と対応） …… 286
写真215　拝殿南調査区　9層出土鉄製品（番号は第126図と対応） …… 286
写真216　拝殿南調査区　9層出土須恵器（番号は第126図と対応） …… 287
写真217　拝殿南調査区　10層出土遺物（番号は第127図と対応） …… 289
写真218　拝殿南調査区　11層出土遺物（番号は第128～129図と対応） …… 295
写真219　拝殿南調査区　陶磁器類（番号は写真219と対応） …… 296
写真220　拝殿南調査区　拝殿調査区（南から） …… 300
写真221　拝殿南調査区　ＳＤ０１上面検出状況（南から） …… 300
写真222　拝殿南調査区　ＳＤ０１半裁状況（南から） …… 301
写真223　拝殿南調査区　ＳＤ０１蓋石取り上げ後の状況（南から） …… 301
写真224　拝殿南調査区　ＳＢ０１石列検出状況（拡張前：南から） …… 305
写真225　拝殿南調査区　ＳＢ０１石列検出状況（拡張後：南東から） …… 305
写真226　拝殿南調査区　ＳＢ０１土坑検出状況（拡張後：西から） …… 306
写真227　拝殿南調査区　ＳＢ０１　ＳＫ０２半裁状況（拡張後：西から） …… 306
写真228　拝殿南調査区　8層上面検出状況（南から） …… 311
写真229　拝殿南調査区　9層上面検出状況（南から） …… 311
写真230　拝殿南調査区　ＳＤ０２完掘状況（南西から・土器は再配置） …… 312
写真231　拝殿南調査区　ＳＤ０２完掘状況（南から・土器は再配置） …… 313
写真232　拝殿南調査区　ＳＤ０２遺物出土状況（南から） …… 313
写真233　拝殿南調査区　ＳＤ０２出土須恵器１（番号は第140図と対応） …… 319
写真234　拝殿南調査区　ＳＤ０２出土須恵器２（番号は第140図と対応） …… 319
写真235　拝殿南調査区　ＳＤ０２出土須恵器３（番号は第140図と対応） …… 320
写真236　拝殿南調査区　ＳＤ０２出土須恵器４（番号は第140図と対応） …… 321
写真237　拝殿南調査区　ＳＤ０２出土土師器・カマド（番号は第141図と対応） …… 322

写真238　柱根をとりまく礫に生じた青灰色部と褐色部（矢印はその境界）…… 355
写真239　分析に用いた試料（スケールは5㎝方眼）…… 356
写真240　心御柱下の土層より抽出された微粒炭の例 …… 388
写真241　奈良時代の土層より抽出された微粒炭の例 …… 388
写真242　古墳時代の土層より抽出された微粒炭の例 …… 389
写真243　出雲大社境内の4－5世紀土層より抽出された炭片の例 …… 389
写真244　出土木質遺物の顕微鏡写真(1) …… 394
写真245　出土木質遺物の顕微鏡写真(2) …… 395
写真246　出土木質遺物の顕微鏡写真(3) …… 396
写真247　出土木質遺物の顕微鏡写真(4) …… 397
写真248　心御柱北側試料の走査型電子顕微鏡写真 …… 403
写真249　天然赤鉄鉱の走査型電子顕微鏡写真 …… 403
写真250　ローハベンガラ（人造ベンガラ）の走査型電子顕微鏡写真 …… 404
写真251　露3－2　赤線が安山岩の範囲で、泥岩の層理面に沿って安山岩が貫入している。…… 409
写真252　自破砕安山岩の露1－2 …… 410
写真253　泥岩に自破砕安山岩が貫入している露2－1 …… 410
写真254　露2－1を写真202と反対方向からうつす …… 410
写真255　露2－1に見られる正断層。落差は、約80㎝である。 …… 410
写真256　露2－1に近い八雲滝に見られる、安山岩中に取りこまれた泥岩。
　　黒い部分が泥岩。 …… 411
写真257　露3－1に見られる平行葉理が発達した泥岩層 …… 411
写真258　出雲大社境内遺跡の計測風景 …… 432
写真259　心御柱の計測風景 …… 435
写真260　当初案復元模型の床上部分 …… 455
写真261　当初案復元模型正面全景（床高は後述するB案に従う） …… 456
写真262　復元模型写真1 …… 481
写真263　復元模型写真2 …… 482

第1章

位置と環境

第1章　位置と環境

第1節　地理的環境

1．遺跡の位置

出雲大社境内遺跡は、出雲大社の境内（島根県簸川郡大社町大字杵築東）に所在する。

遺跡の所在する大社町は、島根半島の西端部の山地とその南に接する出雲平野の北西部からなり、平野部の海岸沿いには砂丘が南北に延びている。出雲平野は、北を島根半島北山山系、南を中国山地、西を日本海、東を宍道湖に囲まれた東西約20km、南北約5kmの県内最大の平野で、有数の穀倉地帯として知られる。

この平野のなかほどに、出雲市とその東にある斐川町の間を一級河川の斐伊川が流れる。斐伊川は島根県の山間部の横田町に源があり、北上して出雲平野に流れ出た後、東へ流れを変えて宍道湖にそそぐ。また、島根県の山間部の赤木町に源をもつ神戸川は、大社町の南西端、出雲との境界に河口があり日本海に流れ出る。

遺跡が位置するのは出雲平野の中でも北西端、日本海（大社湾）から東へ約1.2km、北山山系に接する地点に位置する。

写真1　大社町全景（南東上空より）

2．遺跡の範囲

遺跡台帳に登録される本遺跡の総面積は、現在の「荒垣」に囲まれる範囲の27,100㎡である。ただし、荒垣の外側でも遺物が出土しており、遺跡の範囲はさらに周辺へと広がる可能性が高い。

写真2　出雲大社境内（南上空より）

3．出雲大社の地理的基盤

出雲大社本殿が鎮座する境内地は、北山山系の谷間に位置し、三方を山で囲まれ南に開けて出雲平野を望む。境内地の北に禁足地である八雲山を控え、東西にそれぞれ亀山、鶴山を配する。これらの山と山の間に流れる吉野川（能野川）と素鷲川による扇状地に立地している。

遺跡所在地を含む出雲平野のほとんどは縄文時代の海進期には海域であったが、縄文後・晩期以降の海退と、三瓶山の噴火活動、二大河川である斐伊川・神戸川の沖積作用などによって平野が形成されていく。平野中央部が形成され始めたのは、遺跡の分布状況や地質学的研究から約3,600年前のことと考えられている。以来徐々に平野は広がり、人々の生活空間も広がっていった。中・近世、上流の中国山地における製鉄業の隆盛に伴い、「鉄穴流し」による土砂流入量が増大し、平野の形成・拡大に大きな役

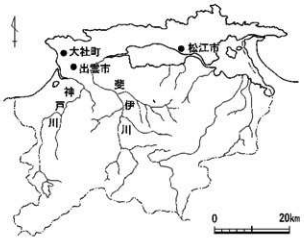
割を果たした。それまで日本海に流れ出ていた斐伊川が宍道湖へと流路を変え現在の地形に定着したのは江戸時代以降のことである。

遺跡の所在する杵築が立地する砂州の形成については、本書第15章地質コア分析と周辺の環境変遷に関する考察にくわしい。

【参考文献】

大社町史編集委員会 1991『大社町史』上巻 大社町

第1図　島根県の位置（S＝1/8,000,000）



第2図　大社町の位置（S＝1/1,000,000）

第2節　歴史的環境

1．出雲大社の歴史

第2節の1では文献史料から出雲大社の変遷をみていく。（以下の文章は、佐伯徳哉2002「出雲大社の巨大社殿と歴史意識―出雲大社文書を読む前に―」『島根県の歴史を語る古文書　出雲大社文書―中世杵築大社の造営・祭祀・所領―』島根県古代文化センター編を基に作成している。）

【文献からみる社殿の変遷】

神社の原始的形態としては、巨岩を神座として祀る「いわくら」、山を神として祀る「神名火」などがあげられるが、いつ頃からか神を社殿に祀るようになった。その時期は定かではないが、神話の記述などから、山本清氏は古墳時代にそれを求められるとしている（文献2）。

古代

出雲大社の創建に関する文献は、『日本書紀』の斉明天皇5年（659）の項に

是歳、命出雲国造。修厳神之宮。

とあるのが初出である（一方、神の宮を出雲国意宇郡の熊野大社であるとする説もある）。

つづく天平5年（733）に成立した『出雲国風土記』には、下記のような記載がみられる。（加藤義成校注 1988『出雲国風土記』今井書店より抜粋して転載）

出雲郡

杵築郷。郡家の西北二十八里六十歩なり。八束水臣津野命の國引き給ひし後、所造天下大神の宮奉へまつらむとして、諸の皇神等宮處に參り集ひて杵築きたまひき。故、寸付と云ふ。〔神亀二年に、字を杵築と改たむ。〕

神門郡

吉栗山。郡家の西南二十八里なり。

〔檜・杉あり。謂はゆる所造天下大神の宮材造る山なり。〕

ここでは、古代出雲大社を出雲国四大神のひとつ「所造天下大神（あめのしたつくらしししおおかみ）」として特別な位置付けがなされ、その神殿の高大さの由来や用材の採取地について記されている。

平安時代中頃、天禄元年（970）に源為憲の著した『口遊（くちずさみ・くゆう）』（貴族の子弟の一般教養書）によれば、建築の雄大なるものを全国的に見てそれぞれ三つ挙げ、その順序を

雲太。和二。京三。謂大屋誦。

今案。雲太。謂出雲国城築明神今殿。在出雲郡。和二。謂大和国東大寺大仏殿。在添上郡。京三。謂大極殿八省。

としている。

この記録から、この時代の常識として、杵築大社（＝出雲大社）が、日本で最も高い建造物をもつ社とされていたことがわかる。

東大寺大仏殿は、延暦僧録によれば、当時の高さは十五丈（約45m）とある。この大仏殿を第二に抑えてそれより高く出るのが杵築大社であるならば、その高さは、社伝として中世の文献にあるように、十六丈（約48m）という復元ができるのではないかとの見解が示されてきた。

古代出雲大社の本殿が高層建築であったと考える傍証の1つとして挙げられてきたものに、文献に残る社殿転倒の記録がある。転倒は康平4年（1061）、天仁2年（1109）、保延7年（1141）、永安2年（1172）、嘉禄元年（1225）と、二百年足らずの間に延べ五回にも及ぶ。

『日本紀略』『左経記』『百錬抄』などの古文書に、九世紀におきた社殿転倒詐称事件の顛末の記録が残る。それらによれば、長元4年（1031）、出雲国司橘俊孝より、杵築社が転倒したという報告があり、翌年、俊孝は、朝廷に対して再建に必要な経費・労働力に関する諸要求を行なったが、法外な要求ゆえに疑われ、結局、杵築大社神官らと結託しての倒壊詐称が発覚し、佐渡へ流罪となっている。このような詐称が可能だったことは、巨大社殿への共通認識が存在したことを強く印象づける。

中世

建仁2年（1202）7月20日以前に杵築大社に参詣した寂蓮法師は、社殿の雄大さを表して次の歌を詠んでいる。（『寂蓮法師集』）

（前略）

出雲の大社に詣で見侍ければ大雲たな引山のなかばまでかたそぎのみえけるなん此世の事とも覚えざりける

やはらぐる光や空にみちぬらん雲にわけ入ちぎのかたそぎ

この歌から、名だたる巨大社殿を実見した人々が、驚き、感動して、各々郷里に帰って語り伝えていく当時の様子が窺い知れる。

宝治2年（1248）に造営された社殿の様子は『絹本著色出雲大社并神郷図』（重要文化財・千家尊祐氏所蔵）から伺うことができる。この図には拝殿・瑞垣、舞殿・玉垣、その奥に鎮座する朱塗り柱を持つ本殿には千木堅木が聳え、古来の流れを汲む非常に高い床を構えていることなど、古制を守っている社殿の様子が描かれている。

ところが文永7年（1270）正月、この社殿が焼失すると（『帝王編年記』文永七年正月二日条）、約50年にわたって仮殿の造営さえ滞る。

建武新政期から南北朝動乱期に入って、天皇から造営命令が出されるが（建武元年（1334）七月五日「後醍醐天皇綸旨」出雲大社文書、正平12年（1357）九月十八日「後村上天皇綸旨」北島家文書）、結局、正殿造営は行なわれず、14世紀半ば過ぎには仮殿の老朽化さえ問題になった（応安3年（1370）八月二十八日「杵築大社神官等連署申状」千家家文書）。

中世において巨大社殿の造営が行なわれたのは宝治2年（1248）の正殿造営までであったと考えられ、それ以降は仮殿造営を行なったのちも、正殿の造営が完成しない状態が続き、結局、仮殿の修造が繰り返されることで、仮殿が事実上の正殿になっていった（文献4）。

17世紀初め頃に編集された「杵築大社旧記御遷宮次第」（鰐淵寺旧蔵文書）には、1391年に書かれた文書を典拠にして、最行天皇の時三十二丈（約98m）、その後十六丈（約48m）、次に八丈（約24m）、「今」（1391年頃）は四丈五尺（13m強）とだんだん低くなっていった様子が記されている。ここでいう「今」の社殿は、1324年に完成した仮殿を指す。

室町時代に入ると、応永12年（1405）に出雲守護京極高光が、出雲の有力国人松田掃部入道にたいして、室町将軍（足利義持）から造営命令が出されたので、両国造（千家・北島）と談合しながら造営を行なうようにと命じている（応永十二年十月十三日「出雲守護京極高光施行状」出雲大社文書）。その後、応永19年（1412）に社殿が完成し、還宮が行なわれている（年月日未詳「杵築大社造営覚書」佐草家文書）。以降、1442年（？）、1467年、1486年に還宮が行なわれたことが記録に散見するが、詳細は不明である（17世紀初頃「杵築大社旧記御遷宮次第」鰐淵寺旧蔵）（文献4）。

戦国時代に入り、永正16年（1519）、天文19年（1550）に、守護京極氏に代わって出雲国支配権を掌握してきた戦国大名尼子氏によって、造営・還宮が行なわれている。十六世紀～十七世紀半ばまでの杵築大社境内には、朱塗り柱の本殿を中心に、周囲に三重塔や鐘楼・大日堂など寺院建築も建ち並び、仏教の影響が濃厚にみられるようになった（『紙本著色杵築大社近郷絵図』北島英孝氏所蔵）。

近世

神仏習合といわれる神道と仏教の混在は、平安初期からの一般的傾向であり、大社でも1100年ごろから僧侶の読経が行なわれていたという。慶長14年（1609）の造営では高さ19.6mの本殿が完成した。当時の境内を描いた絵図（『紙本著色杵築大社近郷絵図』）には、慶長度本殿の周囲に尼子氏の造営になる三重塔、経堂、輪蔵、経誦所、大日堂などが配されているのがみえる。また、柱も赤色に彩色され、飾り金物を施されており、松江藩の儒者黒沢忠弘が承応2年（16

53）に著した『懐橘談』のなかで、慶長度社殿を実見した著者が、社頭景観について「社共阿良々伎共見分けがたし」[1]と述べている。

ところが一転して寛文7年（1667）の造営では仏教建築物が境内から一掃された。柱も赤色から、白木造りとなり、本殿も高さ八丈（24m）の正殿式遷宮となり、この時の造営で、現在のわれわれが目にする出雲大社の外観が整えられた。その際、境内にあった三重塔を兵庫県養父郡八鹿町の名草妙見社に譲渡移築し、その代償として用材を求めて造替した。この塔は名草妙見社に現存し、国の重要文化財の指定を受けている。

近・現代

本殿はその後、延享元年（1744）に造営し、文化6年（1809）、明治14年（1881）、昭和28年（1953）に修理を加え、現在にいたる。

【造営体制の変遷】

杵築大社の創始から現在まで一貫して、巨大神殿が意識され、その実現になみなみならぬ労力が注がれてきた背景には、各時代の主権力との関係を切り離して考えることはできない。以下では、造営体制の変遷を通して、出雲大社の歴史を概観する。

古代

神社の創始に関しては、『日本書紀』の神代巻や『古事記』のいわゆる「国譲り神話」のなかで、大国主命[2]が、天神に葦原中国を譲渡する代償に、巨大神殿の建造が約された、と記されている[3]。

これら国家によって編纂された史書にみられる、出雲に関係した神話は、すなわち日本における律令国家形成の神話であるため、特別な位置付けで大きな比重をもって語られている。さらに杵築大社の巨大神殿創始の神話がそのクライマックスにおかれているのは意義深い。

古代の造営のあり方を具体的に示す史料は著しく制約されているが、承暦2年（1078）の主税寮正税返却帳から、かろうじて読み取れる。そこには、長徳4年（998）の杵築大社玉垣造営に際し、出雲国司が、国衙に収納された正税のなかから、頴九万三千余束を支出したと記録されている。つまり、古代の大社造営は、国司が班田農民から集めた租税を用い、国司の責任において執行するのが原則だった。

また、この頃の主祭神は大国主命であったことは出雲国造が、新任ごとに都に上り、天皇に奏上した「神賀詞」（出雲国の神々の祝福の詞を天皇に申し上げる儀式。出雲国造の天皇に対する服属儀礼とする説もあるという）に大穴持命を祀っていることを述べていることからもわかる。

平安時代に国家によって作成された『延喜式』（律令格の施工細則）の神名帳によれば、10世紀初め頃の出雲国には、国家から幣帛をうけることができる格式を持った式内社が178座あり（これは大和国・伊勢国についで全国で三番目に多い）、そのうちの首位にあたる明神大社は、意宇郡の熊野大社と出雲郡の杵築大社の二社であった。

中世

平安時代後期から鎌倉時代に（11世紀後半から13世紀半ば）にかけて、杵築大社の造営は、地方行政機関である出雲国衙から出雲国司（在京）を通して国家に造営許可の申請を行い、それをうけて国家命令が出されていた。太政官（弁官局）などから出される国家命令を根拠に、国衙が、一国平均役と呼ばれる臨時目的税を出雲国内から徴収した。つまり、荘・郷・保・別府などの各領主に命じ、それぞれ費用の一部を分担させて、仮殿造営を経て正殿造営にいたる造営事業を完遂する、という形をとった。このような造営形態が確立したのは、康平・治暦の造営（1067年に遷宮）の頃からである。この造営機構が整えられたことで、杵築大社が出雲国の一宮として位置付けられた[4]。

久安元年（1145）に正殿式遷宮が行なわれた保延～久安の造営は、着手から完成までの期間が5年という円滑なものであった。これは、のちの時代まで理想的な造営と考えられたようで、この時の造営を記録した「杵築大社造営遷宮旧記注進」（北島家文書）は、中世の造営記録の中でももっとも詳細なものである。この時、出雲国司であった藤原光孝は、のちに杵築大社領の領家となるが、1170年ごろには、さらに社領を後白河上皇に寄進し、ここに天皇家を本家とする杵築大社領が成立し、杵築大社およびその社領が本格的に荘園化することとなる。

建久の造営（建久元年（1190）に遷宮）については、具体的な記録がわずかしか残されていない。この時期は、治承・寿永の内乱（1180～1185年）による平氏政権の崩壊、奥州藤原氏の滅亡（1189年）を経て、鎌倉幕府が成立する頃と重なる。さらに杵築大社を祀る出雲国造出雲氏も、鎌倉の新権力によって、杵築大社神主・惣検校職（そうけんぎょうしき）を剥奪されるなど、従来の造営体制の維持を脅かす非常時であった。

その後、出雲氏はこれらの職に復帰するが、領家が任命権を持つ両職のうち神主職を、領家に近しい中原氏と交互に任命されることになる。このことに対し、出雲氏は、相伝の国造職と神主職との一体を主張しつづけ、建保2年（1214）、土御門院庁（杵築大社およびその社領の本家であり、領家の上位にある）において、この主張が認められている（建保二年八月日「土御門院庁下文」北島家文書）。しかし、承久の乱を経て、配流となった土御門院の裁定が実施された痕跡はない。

理想とされた造営体制は、久安の造営を頂点に次第に滞りはじめ、宝治の造営では、造営着手から本殿の棟上までに7年、宝治2年（1248）の遷宮までに、それよりさらに15年もの歳月を費やしている。この時は、本来、造営事業とは直接的には無関係であった鎌倉幕府も、造営途中から出雲国内の幕府御家人に役を課して財政的な支援を行なっている。

文久7年（1270）に宝治度社殿が焼失してからのちは、さらに従来の造営機構が働かなくなる。出雲国の知行国主の命令を元に国衙機構が造営を実施しようとするが、目代の主導権が滞り、造営が頓挫を繰り返す（年不詳「沙弥（佐々木泰清）書状」千家家文書）。これに先立って、13世紀半ばには出雲国造が出雲守護佐々木氏と提携しながら国衙機能の一部である国衙祭祀権を吸収していくが、14世紀初頭には中原氏を圧倒して杵築大社の神主職を独占し、仮殿造営権を獲得することになる。また、この過程で、鎌倉幕府が、事実上の造営主導権を行使するようになり、既存の機能である国衙を利用しながら出雲守護をはじめ出雲国内の有力御家人を造営奉行に任じて、正殿造営を完成させるべく事業を続行するが、仮殿完成後、正殿造営中に幕府が滅亡し、以降正殿造営は未完のままとなる。

室町時代の(3)応永の造営では、室町将軍（足利義持）から造営命令が出されたことを受けて、出雲守護京極高光が、出雲の有力国人に、両国造（千家・北島）と談合しながら造営を行なうように命じている。

戦国時代に入り、守護京極氏に代わって出雲国支配権を掌握してきた戦国大名尼子氏が、杵築大社の造営を主導するようになる。尼子経久が永正16年（1519）に、その孫の尼子晴久が天文19年（1550）に、それぞれ造営を完成させ遷宮を行なっている。経久は、出雲国内から人別五文の臨時税を徴収して造営にあたったが、晴久による天文年間の造営以降、造営事業に本願聖が制度的に関与するようになり、後には神社内の庶務をおこなうようになる。ここに、中世成立期以来行なわれてきた一国平均役に基づく大社造営方式にかわり、新しく、大社本願による造営が成立した。造営は原則的に本願の努力によって行なうこととなった。これと同時に、中世一宮制も衰退していくこととなる。この頃の、仏教建築の影響を濃厚に受けている社殿の様子が絵図に残る（『紙本著色杵築大社近郷絵図』北島家蔵）。

安芸国の戦国大名毛利氏が尼子氏を滅亡（1566年）させて後、天正8年（1580）の造営は、毛利輝元によるものである。関が原の戦いを境に、出雲国の領主が毛利氏から堀尾氏となって後の慶長14年（1609）には、豊臣秀頼の出資によって造営が行なわれ、高さ19.6mの本殿が完成している。

近世

1660年に入って、出雲松江藩主松平直政が、幕府の財政援助を受けて造営を開始、寛文7年（1667）に落成、遷宮している（寛文の造営）。この造営にあたって、境内から仏教色を排除するよう幕府に働きかけ、寛文2年（1662）に寺社奉行の了解を得ている（「寛文造営記抄」大社町史）。これをうけて本願聖を追放し、境内の仏教建築を移築するなどして、仏教勢力の一掃に成功し、唯一（神道）の社頭を実現した。この造営では白木作りの質朴な社殿を配置し、高さ八丈（24m）の本殿を造り、これを正殿式と称するなど、ほぼ現在の出雲大社境内の形態が整えられた。この寛文の造営で、他に約二世紀も先駆けて神仏分離を行い、その革新的手法で、出雲一宮としての威光を取り戻すことに成功している。

近・現代

現在われわれが目にする本殿は、その後の延享元年（1744）に、寛文の造営と同様のプランで建て替えられたものである。文化年間、明治と修理を加え、昭和27年に国宝指定を受けて後、昭和28年に修造して現在にいたる。

現在、出雲大社において国宝に指定されている文化財としては、建造物の出雲大社本殿（附内殿1基、棟札1枚）、及び鎌倉時代初期の作である秋野鹿蒔絵手箱1合がある。

註

(1) 阿良々伎…斎宮の忌詞（伊勢の斎宮で、神慮をはばかり、仏語と不浄語とを忌んで代わりに用いた語。「寺」を「瓦ぶき」、「仏」を「中子」、「僧」を「髪長」などがある）で、塔の異称。和訓栞に、野積の墓のたつところよりいうとある。

(2) 大己貴命・大物主神・所造天下大神・大穴持命など複数の呼称がある。

(3) この時、天神が、出雲国造の遠祖である天穂日命に、巨大神殿に居住することになる大国主命を祀らせることを約している。

(4) 古来、杵築大社は「杵築社」もしくは「杵築大社」の名をもってよばれていた。現在いう「出雲大社」の呼称は、近代の明治五年になって成立したものであり、明治四年以前は「杵築（大）社」が正式の神社名だった。ところが実際には十一世紀中頃に「出雲大社」の称号は成立していた。現在のものと違い、中世の「出雲大社」は、「出雲の国の大社」の意を指す。文献によって確認できるその最初の事例は、鎌倉後期の『百練抄』の康平5年の造営に関する記事に見える。この造営を境に「出雲大社」の称号が現れていることは、山雲国衙及び中央政府が杵築大社を「（出雲）国中第一の霊神」＝出雲一宮と認め、一国平均役による造営・遷宮を承認したことを意味するものであったと考えることができる（文献2）。

(5) 当時の杵築大社の信仰圏の拡大には、十五世紀中葉に出現した御供宿[10]・室[11]の制度の存在が大きい（文献5）。室職所有者は各地の領主に、軍事的・経済的・精神的（祈祷等）な援助をする見返りに、その領民を参詣客として自分の経営する宿に宿泊させることを要求した。それによって室職所有者たちは、村落や知行地に信仰エリア（壇所）を獲得した。室職所有者と参詣客の間には、いわゆる師壇関係が成立し、杵築大社信仰を広める基盤となっていった。近世には御師と呼ばれる人々が、それぞれの受け持ちの区域を回り、祈祷や神札配布、参詣の勧誘な

ど、民衆との直接交渉により信者や参詣人の獲得に努めたことが知られている。御師たちが比較的スムーズに村落に入っていくことができたのは、戦国期における塩所獲得の動きがあったからこそである（文献2）。

(6) 杵築に設けられた宿泊施設。当時の参詣人は、それぞれ定められた宿で泊まることになっていた。

(7) 御供宿を提供する権利のこと。室の所有は、世襲制であった。所有者は、杵築大社に一定額の権利料を納入した。参詣人は室職所有者に宿泊料を支払うとともに、杵築大社（国造家）に供物を納めることになっていた。

【参考文献】

1．出雲大社社務所 1989『出雲大社社殿の変遷』

2．大社町史編集委員会 1991『大社町史』上巻 大社町

3．松尾充晶 2000「出雲大社境内遺跡の調査」『月刊考古学ジャーナル』No.465 ニュー・サイエンス社

4．島根県古代文化センター 2002『島根県の歴史を語る古文書　出雲大社文書　―中世杵築大社の造営・祭祀・所領―』

5．井上寛司 1988「中世杵築大社の年中行事と祭礼」『大社町史研究紀要』三号　大社町教育委員会

2．周辺遺跡・文化財の概要

以下では出雲平野における遺跡の概要を各時代について述べる。なお文中の（数字）は、第3図の番号と対応している。

縄文時代

現在出雲平野で知られている早期末の遺跡として、西部の砂丘下にある上長浜貝塚（30）がある。続く前期末～中期では遺跡数が少なく、上ヶ谷遺跡（37）が確認されているにすぎない。海退の進む後・晩期には、それまで遺跡のなかった地域に新たな集落の出現がみとめられ、平野南部の丘陵下に三田谷Ⅰ遺跡（24）、後谷遺跡（36）平野中央に矢野遺跡（13）などがある。

出雲大社境内遺跡が位置する平野北西部の大社町内では、平野部最古の遺跡のひとつとして知られる菱根遺跡（11）があり、早期終末の縄文土器が出土している。原山遺跡（8）からは、後・晩期の縄文土器が確認されており、本遺跡からも晩期の土器が出土している。

弥生時代

前期の遺跡として三田谷Ⅰ遺跡（24）のような谷筋低地に位置する遺跡で縄文後・晩期から継続する例があるほか、新たに平野中央部でも遺跡の展開が認められ、中期以降に中心集落となる矢野遺跡（13）や蔵小路西遺跡（14）でもわずかながら前期末の遺物が出土している。また南部丘陵には、青銅器埋納遺跡である荒神谷遺跡（39）が有名で、ここから出土した大量の青銅器の中には最古段階の銅鐸も含まれており、弥生時代前期における出雲平野の有力集団の存在が想定されるが現在それを裏付ける集落の発見には至っていない。

中期中葉以降は集落の分布が徴高地上に広く展開し、平野南西部に、知井宮多聞院遺跡（29）、大溝が集落を区画する古志本郷遺跡（25）、天神遺跡（20）、下古志遺跡（27）、田畑遺跡（26）などの広範囲にまとまった大規模な集落遺跡が見られる。

後期になって居住が開始する集落も多く、平野内一円に遺跡の分布が広がっていく。姫原西遺跡（15）、平野部で初めて四隅突出型墳丘墓が確認された中野美保遺跡（16）、銅鐸片や四隅突出型墳丘墓が発見された青木遺跡（32）など、沖積地上にも集落が営まれる。後期には首長による地域統合を推測させる墳墓の造成も盛んになり、西谷墳墓群（18）では丘陵上に大規模な四隅突出型墳丘墓が築かれた。後期中頃には三田谷Ⅰ遺跡（24）で県内唯一の事例として報告された方形周溝墓が確認されている。

大社町内では、弥生前期の配石墓とともに山

陰地方最古の弥生土器が出土したことで、出雲平野における弥生土器研究の画期となった原山遺跡（8）が有名である。前期はほかに本遺跡、南原遺跡（9）がある。後期は鹿蔵山遺跡（4）、大量の木製品とともに護岸施設と思われる杭列が検出された五反配遺跡（3）が確認されている。また、本遺跡より東方200mに真名井（命主社境内）遺跡（2）がある。文献によれば、杵築大社の寛文造営に際し命主社付近の石を社域の用材として切り出し求めた際に、社殿の背後にある大石の下から複数の武器型青銅器と硬玉製勾玉が発見されたというもので、現在では完形の銅戈1点と勾玉のみが出雲大社に伝わるのみである。猪目洞窟遺物包含層（35）では、海に開けた洞窟内に、弥生時代前期～古墳時代後期までの土器と埋葬施設が確認されている。ここでは、集落と隔絶した洞窟内で生活と埋葬が平行して行なわれていた。眼下に日本海を一望する地点にある、ひろげ遺跡（6）からは、浜石を大量に集めてつくられた祭壇状の遺構・土器溜り・焚火跡が検出され、弥生時代後期～奈良時代まで何らかの祭祀が行なわれていたことが推定される。

古墳時代

出雲平野中心部の集落は急激に衰退する。それにあわせて西谷の四隅突出型墳丘墓も築かれなくなり、この時期大きな変動があったことが窺われる。出雲平野で造られたのは、前期では大寺1号墳（33）と山地古墳の2基が確認されているにすぎない。中期に軍原古墳（41）、神庭岩船山古墳（40）などが造られるが、依然として少ない。しかし後期になると急にその数は増加してくる。北山山麓に上島古墳（34）、神戸川右岸に築造された全国最大級の家形石棺を有する大念寺古墳（19）、その後、上塩冶築山古墳（22）、地蔵山古墳（23）と首長系統の大規模な古墳が続く。終末期になると九州系の横穴墓が出現する。神戸川右岸の上塩冶横穴墓群（21）は県内でも最大規模の横穴墓群として知られる。左岸にも右岸に比べて小規模ではあるが、妙蓮寺山古墳、宝塚古墳（28）、放れ山古墳などがあり、地蔵堂横穴墓群などの大規模な横穴墓群が形成されていて、右岸と同じ様相を呈す。

大社町内では、鹿蔵山遺跡（4）、原山遺跡（8）、南原遺跡（9）から土器が出土している。修理免本郷遺跡（7）では、前期・後期に生活が営まれていた。後期の遺跡はほかに、ひろげ遺跡（6）がある。

奈良・平安時代

当時の官衙跡との関連が推定されるものとして、古志本郷遺跡（25）、三田谷Ⅰ遺跡（24）、天神遺跡（20）、後谷遺跡（36）などがある。注目されるのは杉沢Ⅲ遺跡（38）から九本柱の掘立柱建物遺構が検出されていることである。大社造と同様の2間×2間の総柱構造をもつことから、宗教的施設である可能性が指摘されている。

大社町内では、本遺跡、本遺跡から南に800メートル地点にある鹿蔵山遺跡（4）から奈良三彩・緑釉陶器・腰帯金具・墨書土器などが出土している。絵馬・木簡・日本最古の神像・大量の墨書土器などが出土した青木遺跡（32）は、鹿蔵山遺跡とともに、官衙施設を含めた性格の検討が進められている。

また、『出雲国風土記』に載る神門水海の汀線付近に中分貝塚（10）がある。

中世

古代、出雲国の政治の中心は国庁（現在の松江市）であったが、中世に入って、出雲一宮の杵築大社及びその別当寺としての鰐淵寺の影響や、出雲守護職佐々木氏が出雲平野中央部の塩冶郷に守護所を置いたことなどにより、鎌倉時代後半の一時期、出雲平野が出雲国の中心となった。この時代の遺跡としては、国人領主朝山氏の館跡と推定される蔵小路西遺跡（14）、国の重要文化財の指定を受けた青磁が副葬されてい

た荻杼古墓（17）などがある。戦国時代には尼子氏と毛利氏との争いもあり、高瀬城（42）、窩ヶ巣城（31）など、平野を見下ろす丘陵上に多くの山城が点在している。

戦国期になると、争乱による社会的・経済的疲弊から、さまざまな新興宗教・信仰・思想が台頭した。全国に法華経を埋納または納経して歩く廻国聖の活躍もそのころで、奉納山経塚（5）から出土した金銅製経筒の銘文に常州・野州・紀州・予州などの国名が見られるのも、全国から出雲一宮の杵築大社を目指して廻国聖が巡ってきたことをあらわす。

鷲銅山（12）は戦前まで採鉱されていた鉱山で、その開山時期は定かではないが『銀山旧記』によれば、鷲銅山が石見銀山の発見に関与する鉱山として登場していることから、中世までさかのぼる可能性がある。また、神光寺跡では一般に石見地方で流通している福光石製の一石宝篋印塔が出土していることからも当地方と石見銀山との関係が指摘されている。

参考文献

- 大社町史編集委員会 1991『大社町史』上巻 大社町
- 大社町史編集委員会 2002『大社町史』史料編（民俗・考古資料）大社町
- 島根県教育委員会 1998～2000『斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』Ⅳ～Ⅷ
- 鳥谷芳雄 2001「大社町神光寺旧跡の一石宝篋印塔」『石見銀山遺跡ニュース』島根県・大田市・仁摩町・温泉津町教育委員会
- 斐川町教育委員会 2001『杉沢Ⅲ・堀切Ⅰ・三井Ⅱ遺跡発掘調査報告書』

表1　周辺の遺跡一覧

地図番号	遺　跡　名	時　代	主な遺物・遺構	備　考
1	出雲大社境内遺跡	縄文～現代	旧本殿・拝殿遺構、巨大柱根	本殿国宝指定
2	真名井(命主社境内)遺跡	弥生	銅戈、硬玉製勾玉	重文指定
3	五反配遺跡	縄文～奈良	木製品、杭列	
4	鹿蔵山遺跡	弥生～中世	奈良三彩、腰帯金具、墨書土器	官衙関連
5	奉納山経塚	中世	金銅製経筒、銭貨	
6	ひろげ遺跡	弥生～奈良	祭壇状遺構、焚き火跡	
7	修理免木郷遺跡	古墳～中世	木製品、土師器、須恵器	
8	原山遺跡	縄文～中世	配石墓、出雲平野最古の弥生土器	
9	南原遺跡	弥生～近世	弥生土器、磨製石斧	
10	中分貝塚	奈良・平安	漁具、獣骨、貝殻	神門水海関連
11	菱根遺跡	縄文	縄文土器、石器、骨角器	出雲平野最古級
12	鷺銅山	室町～昭和	採掘坑	
13	矢野遺跡	弥生	十壙墓、弥生土器	
14	蔵小路西遺跡	弥生～中世	弥生集落跡、中世館跡	国人領主館跡か
15	姫原西遺跡	弥生	木製品、弥生土器	
16	中野美保遺跡	弥生	方形貼石墓四隅突出型墳丘墓	
17	荻杼古墓	中世	骨壺、甕	重文指定
18	西谷墳墓群	弥生	四隅突出型墳丘墓、特殊器台、石棺	国史跡
19	大念寺古墳	古墳	91mの前方後円墳、横穴式石室、石棺	国史跡
20	天神遺跡	弥生	環濠集落跡、土師器、須恵器	
21	上塩冶横穴墓群	古墳	34支群115穴以上	
22	上塩冶築山古墳	古墳	40余mの円墳、横穴式石室、石棺	国史跡
23	地蔵山古墳	古墳	15mの円墳、横穴式石室、石棺	国史跡
24	三田谷Ⅰ遺跡	縄文～平安	丸木舟、墨書土器、斎串、石帯、掘立て柱建物	神門郡衙関連
25	古志本郷遺跡	奈良・平安	大型建物柱跡、土師器	官衙関連
26	四畑遺跡	弥生～中世	環濠集落跡、須恵器、中世土師器	
27	下古志遺跡	弥生～中世	環濠集落跡、古式土師器、建物跡	神門郡衙関連
28	宝塚古墳	古墳	横穴式石室、家形石棺、埴輪	国史跡
29	知井宮多聞院遺跡	弥生	弥生土器、須恵器、貝類	
30	上長浜貝塚	縄文	貝類、獣骨、弥生土器、須恵器	出雲平野最古級、旧称長浜貝塚
31	蔦ヶ巣城跡	中世	城郭遺構	
32	青木遺跡	弥生～近世	近畿式銅鐸、四隅突出型墳丘墓、木彫神像	官衙関連
33	大寺1号墳	古墳	52mの前方後円墳、竪穴式石室	
34	上島古墳	古墳	円墳、竪穴式石室、家形石棺	国史跡
35	猪目洞窟遺物包含層	弥生・古墳	縄文土器、弥生土器、須恵器、人骨	
36	後谷遺跡	縄文～平安	礎石建物跡、竪穴住居跡	出雲郡衙正倉跡
37	上ヶ谷遺跡	縄文	縄文土器	
38	杉沢Ⅲ遺跡	奈良・平安	総柱建物、土師器、須恵器	
39	荒神谷遺跡	弥生	銅剣358本、銅矛16本、銅鐸6個	国史跡、国宝指定
40	神庭岩船山古墳	古墳	48mの前方後円墳、船形石棺	県史跡
41	軍原古墳	古墳	50mの前方後円墳か、長持形石棺	
42	高瀬城跡	中世	城郭遺構	

（1～12：大社町、13～33：出雲市、34・35：平田市、36～42：斐川町）

第3図　周辺の遺跡（S＝1/100,000）

第2章

調査に至る経緯と経過

第2章　調査に至る経緯と経過

第1節　調査に至る経緯と経過

出雲大社境内遺跡は、昭和28年の防災工事、拝殿工事等により縄文～近世に至る遺跡として知られていた。

平成8年12月、出雲大社よりかねてより計画のあった拝殿東側の地下祭礼準備室建設について、遺跡地内であるのでその取扱いについて協議を行なった。その結果、工事施工業者が決定次第、調査方法、日程を詰めることとし、極力工事と併行して行なうことを確認した。

その後、建設計画の変更があったため、平成9年度においては調査は実施しないこととした。なお、この間、大社町では杉原清一氏（島根県文化財保護指導員）を調査員として委嘱し、調査を進めることとした。

平成10年8月、工事実施に際し、出雲大社と大社町教育委員会と協議を行い事前に正確な層位を確認するため試掘調査を行うこととなった。

平成10年10月29日に試掘調査を行い、層位確認及び遺物（土師器片、高坏片）の採取及び柱根頭部を確認した。これを受け、工事の矢板打設終了後、調査を行なうこととし、平成11年9月より調査を開始した。

また、平成12年3月からは島根県教育委員会から調査員3名、補助員1名の技術指導を受けて、年度内調査完了を目指した。このような中、調査区東側から勾玉が出土し、また西側では、『金輪御造営差図』に示される大型本殿遺構の可能性が高い遺構が検出されたため、平成12年3月11日、工事中止及び遺跡の保存を出雲大社と協議。同月13日、出雲大社のご理解により、工事を中止し遺跡を保存することになった。また平成12年度からは国庫補助を受け、内容確認調査として引き続き調査を行なうこととなった。

第2節　調査の経過

1　平成12年度発掘調査

平成12年度は、平成11年度の地下祭礼準備室建設に伴う発掘調査調査区を引き続き調査区として4月3日から国庫補助事業の内容確認調査を開始した。調査面積は、450㎡である。4月5日には、調査区北西端から柱根の一部が出土し、24日には柱材3本を結束した巨大柱（宇豆柱）であることを確認した。5月には巨大柱周辺を残して、調査区を埋め戻した。さらに、6月13日には、補足調査を終了し、保存の目的で宇豆柱を一時埋め戻した。7月には調査区を北・西側に200㎡拡張して調査を再開した。調査区の周囲に手すり柵を設置し、公開発掘というかたちで調査が進められた。8月には慶長度本殿遺構を検出。慶長度本殿遺構は、重要遺構であると判断し、遺構保存することになった。しかしながら、2号柱跡の直下から巨大柱遺構が検出される可能性があったため、2号柱跡の一部は、保存せず掘り下げることとなった。9月26日に拡張調査区から新たな巨大柱の一部を検出（南東側柱）。9月28日にはさらに北側より巨大柱の一部を検出（心御柱）。10月3日には、心御柱が3本組であることを確認。10月4日には、南東側柱が3本組であることを確認した。10月24日・25日で保存処理のため宇豆柱柱材3本を取り上げた。

11月に心御柱周辺を除いた調査区の埋め戻しを行ない、調査を終了した。

宇豆柱は、県立古代出雲歴史博物館（平成18年度開館予定）に展示される計画で、所有者の出雲大社により、近畿ウレタン工事に委託され、保存処理が行なわれている。

2　平成13年度

埋め戻しを行なっていない心御柱について柱穴の構造を解明するという目的で調査を行なっ

た。事前に周囲の建物に影響がないよう調査区の周囲に矢板を打設し、7月から心御柱調査区の発掘調査を開始した。調査面積は50㎡である。平成12年度7月からの調査と同様に公開しながら発掘調査を進めた。9月中旬には、保存処理のため心御柱の柱材3本を取り上げた。11月初旬に心御柱柱穴を完掘し、埋め戻しを行なった。

12月2日から境内北西部の彰古館北調査区の発掘調査を開始した。調査面積は、95㎡である。翌年平成14年2月下旬に埋め戻しを行ない、発掘調査を終了した。

心御柱は、島根県埋蔵文化財調査センターにて保管されている。

3　平成14年度

6月3日から、拝殿南調査区の発掘調査を開始した。調査区は、当初50㎡であったが、10月に調査区を20㎡拡張したため、総面積70㎡となった。平成12・13年度調査と同様に公開発掘で調査を行なった。調査拡張区で検出されたSB01遺構については、重要遺構であると判断し、遺構を保存した。

12月の下旬に発掘調査を終了し、埋め戻しを行なった。平成14年12月24日をもって一連の発掘調査を終了した。

写真3　公開発掘の様子

第3節　発掘調査指導委員会

出雲大社境内遺跡発掘調査指導委員会（以下指導委員会）は、平成12年5月11日に発足した。考古学・文献史学・建築史学の専門家6名で構成された（委員長：渡邊貞幸　島根大学教授）。指導委員会は、発掘調査・成果の公表を適切に行なうための諮問機関としての機能を果たし、平成12年度3回、平成13年度2回、平成14年度1回を開催した。指導委員会開催日程については、表2を参照いただきたい。指導委員会は、報道関係に公開する方法で開催し、調査員による発掘調査の成果、及び委員からの調査方針・調査成果に関する見解は、報道機関を通じて公表された。

第4節　報道発表

報道発表は合計で7回（内6回が発掘調査の成果、1回が巨大本殿の年代に関する発表）、記者レクチャーを3回行なっている。日程については、表2を参照していただきたい。

平成12年3月に調査区の西端で礫の集石した遺構が検出された。この遺構について「巨大本殿に関連する遺構である可能性」が考えられたが、この段階では巨大柱が未出土であり、遺構に関する正確な情報が得られていなかったため、報道各社に協力を仰ぎ報道規制を行なった。報道規制中は、その時点での調査成果について毎

写真4　発掘調査指導委員会

週１回（計３回）の記者レクチャーが行なわれた。

４月28日に行なわれた報道発表によって、新聞・テレビ放送などにより全国に周知されることとなった。新聞報道では多くの新聞社が全国紙一面扱いとなった。

その後も発掘調査の進展によって報道発表を行なった。（第４図）

報道発表にともなう一般公開を５回行ない、第１回一般公開では、一般公開配布用資料のパンフレット（フルカラー版）を作成し、第２～５回は、リーフレット（モノクロ版）の発掘調査速報を作成し、配布した。

表２　調査と報道の動き

年　月　日	発　掘　調　査　の　動　き	報　道　関　係
平成10年10月29日	試掘	
平成11年９月１日	地下室建設の事前発掘調査開始	
平成12年２月	巨大柱に関連すると考えられる柱台遺構を検出	
３月２日	島根県教育委員会から調査員の派遣を受ける	
３月11日	本殿遺構の可能性が高いものと判断されたため、保存について出雲大社と協議	
３月13日	出雲大社のご理解により工事を中止し、その後は内容確認調査として行うこととなる	
４月３日	保存目的の内容確認調査開始	巨大柱に関連する遺構を調査中により報道規制を行なう
４月５日	巨大柱の一部を検出（柱材の一部）	
４月７日		第１回記者レクチャー
４月14日		第２回記者レクチャー
４月21日		第３回記者レクチャー
４月24日	巨大柱が３本の柱材を結束した柱であることを確認	
４月28日		巨大柱発見について報道発表（第４回記者レクチャー）・報道規制解除
５月６～７日	一般公開（２日間で１万8,800人が見学）	
５月11日	第１回発掘調査指導委員会開催	委員会を公開
７月17日	調査区の拡張（公開発掘）	
８月25日	慶長度本殿遺構を確認	報道発表
10月３日	心御柱（３本束ね）出土	
10月４日	南東側柱（３本束ね）出土	
10月６日		心御柱・南東側柱出土について報道発表
10月７日	第２回発掘調査指導委員会開催	委員会を公開
10月24日～27日	宇豆柱保存処理のため取り上げ	作業を公開
12月10日	第３回発掘調査指導委員会開催	委員会を公開
平成13年７月18日	平成13年度発掘調査開始	
７月27日	平成13年度第１回発掘調査指導委員会開催	委員会を公開
９月14日		心御柱について報道発表
９月18日～21日	心御柱保存処理のため取り上げ	作業を公開
11月９日		心御柱について報道発表
12月３日	彰古館北発掘調査開始	
平成14年３月10日	第２回発掘調査指導委員会開催	委員会を公開
５月31日		巨大本殿の年代について報道発表
６月３日	拝殿南発掘調査開始	
９月19日	平成14年度第１回発掘調査指導委員会開催	委員会を公開
11月28日	ＳＢ０１確認	
12月20日		ＳＢ０１について報道発表

読売新聞
2000年４月29日付

産経新聞
2000年４月29日付

毎日新聞
2000年９月29日付

読売新聞
2000年４月29日付

産経新聞
2000年10月８日付

中国新聞
2000年10月８日付

毎日新聞
2000年10月８日付

第４図　新聞掲載記事

第5節　調査日誌抄

平成10年度

平成10年10月29日（木）晴れ
　試掘調査

平成11年度

平成11年2月19日（金）晴れ
　第1回発掘調査指導会（pm1:30～）

9月1日（火）晴れ
　地下祭礼準備室建設工事に伴う緊急発掘調査開始

9月9日（木）晴れ
　後に慶長度の階段跡と考えられる礎石を検出

10月8日（金）晴れ
　第2回発掘調査指導会（pm1:30～）

10月11日（月）晴れ
　島根大学　渡邊貞幸氏調査指導

10月12日（金）雨
　正月等の祭礼行事により翌12年1月25日まで調査休止

2月5日（土）晴れ
　中世の掘立柱柵列を検出

2月12日（土）曇り
　大阪工業大学　井上寛司氏調査指導

2月20日（日）雨のち曇り
　第3回発掘調査指導会（am10:00～）

2月23日（水）晴れ時々曇り
　森田稔（文化庁）、岩永省三（奈良国立文化財研究所）、吉田広（愛媛大学）、松本岩雄・足立克己（島根県教育委員会）来訪

2月29日（火）晴れ
　国立米子工業専門学校　和田嘉宥氏調査指導

3月2日（木）晴れ
　本日より島根県教育委員会から技術指導者（原田敏照・岩橋孝典・松尾充晶・大野芳典）の派遣を受ける。

3月13日（月）晴れ
　出雲大社のご理解により地下室建設を中止し、遺跡の保存が決定。

3月22日（水）晴れ
　文化庁岡村道雄氏調査指導

3月25日（土）晴れ時々曇り
　横浜市歴史博物館　平野邦雄氏、奈良国立文化財研究所浅川滋男氏調査指導

3月27日（月）晴れ
　島根大学　渡邊貞幸氏調査指導

写真5　調査前の境内

写真6　平成11年度の発掘調査の様子

写真7　平成11年度の調査指導の様子

3月30日（木）曇り
大阪工業大学　井上寛司氏調査指導

平成12年度

平成12年4月3日（月）
平成12年度内容確認発掘調査開始

4月5日（水）雨のち曇り
7N区より柱根を検出、柱根の一部に朱が確認された。柱状高台付坏1点出土

4月7日（金）晴れ
第1回記者レクチャー（pm2:00～）

4月14日（金）晴れ
第2回記者レクチャー（pm2:00～）

4月17日（月）晴れ
東北芸術工科大学　宮本長二郎氏調査指導

4月18日（火）晴れ
奈良国立文化財研究所　町田章氏、同志社大学　辰巳和弘氏調査指導

4月19日（水）雨
柱根付近の礫集中地点にサブトレンチ（幅1m）をいれる。掘り方確認。南側から北側に向かってスロープ状に傾斜していることを確認。

4月20日（木）曇りのち晴れ
島根大学　渡邊貞幸氏調査指導

4月21日（金）曇り一時雨
第3回記者レクチャー（pm2:00～）
文化庁島田敏男調査官調査指導

4月22日（土）晴れ
7N区より2本目の柱根（南柱材）を検出（pm5:05）

4月24日（月）晴れ
7N区より3本目の柱根（北西柱材）を検出（am10:00）

4月25日（火）晴れ
文化庁文化財調査官　坂井秀弥氏、芝浦工業大学　藤澤彰氏調査指導
京都大学名誉教授　上田正昭氏来訪

4月27日（木）曇り
田中義昭氏、島根県立女子短期大学　藤岡大拙氏、同志社大学　辰巳和弘氏、島根大学　渡邊貞幸氏、同　山田康弘氏来訪

4月28日（金）晴れ
巨大本殿遺構発見について報道発表（最終記者レクチャー）（14:00～）
報道解禁（テレビ4月28日5:00より、新聞4月29日の朝刊より）
森浩一氏、椙山林繼氏、黒田龍二氏、岡田荘司氏、辰巳和弘氏来訪

5月6日（七）晴れ
一般公開第1日目（10:00～16:00）
入場者数 9,500名

5月7日（口）曇りのち晴れ
一般公開第2日目（9:00～16:30）
入場者数 9,300名

5月8日（月）晴れ
大社町内小学生の見学会（大社小347名、遥堪小157名、鵜鷺小3名）

5月11日（水）雨
第1回出雲大社境内遺跡発掘調査指導委員会（pm1:30～）

5月16日（火）晴れ
奈良国立文化財研究所　肥塚隆保氏による遺構の保存についての調査指導

5月17日（水）曇り
奈良国立文化財研究所　岩永省三氏調査指導
大社高校生見学会

5月25日（木）晴れ
国立歴史民俗博物館　今村峯雄氏調査指導及び、年代測定用資料採取

5月29日（月）晴れ
6・7N区を残して調査区（平成11年9月殻の調査区）の埋め戻しを開始する。

6月5日（月）晴れ
埋め戻し完了。6・7N区の補足調査開始
京都大学　西澤英和氏調査指導

6月13日（火）晴れ
宇豆柱の一時埋め戻しを行なう。（pm3:00～）

7月3日（月）晴れ
新調査区に所在する石段（本殿・八足門に上がる石段）を撤去するため、仮参道橋工事開始

7月10日（月）晴れ
仮参道橋工事終了。石段西側半分を撤去開始

7月17日（月）雨のち晴れ
八足門前の新調査区（拡張区）の調査を開始。表土剥ぎを開始する。

7月24日（月）雨
1N区より全量採取した土の洗浄・遺物の収集の開始

7月28日（金）晴れ
寛文度（1667）の造成土を確認するとともに寛文度拝殿の一部とみられる遺構を確認

8月1日（火）晴れ
第1回中間報告（寛文度報告）

8月17日（木）晴れ
慶長度造営（慶長14年・1609年）の本殿跡の一部を確認

8月18日（金）晴れ
渡邊貞幸氏調査指導

8月23日（水）晴れ
藤澤彰氏調査指導（pm1:00～）

8月25日（金）晴れ
慶長度本殿遺構を検出したことについて報道発表

8月26日（土）晴れ
一般公開
一般向けリーフレット（発掘調査速報　第1号）を作成し、配布

8月27日（日）晴れ
一般公開
浅川滋男氏調査指導

9月1日（金）曇り時々雨
井上寛司氏・椙山林繼氏調査指導

9月12日（火）雨
渡邊貞幸氏調査指導

9月26日（火）晴れ
6NN区より南東側柱の柱根の一部が出土（pm6:00頃）

9月28日（木）曇り
7NN区より心御柱と考えられる柱根の一部が出土（pm5:00頃）

10月3日（火）晴れ
南東側柱の2本目（南東柱材）が出土
心御柱の3本目（北柱材）が出土

10月4日（水）晴れ
南東側柱の3本目（南西柱材）が出土

10月6日（金）晴れ
心御柱・南東側柱発見について報道発表（pm2：00～）

10月7日（土）晴れ
　第2回出雲大社境内遺跡発掘調査指導委員会（am9:00～）

10月8日（日）曇り時々雨
　一般公開（4,000名）
　一般向けリーフレット（発掘調査速報　第2号）を作成、配布

10月9日（月）晴れ
　一般公開（4,000名）

10月16日（月）晴れ
　坪井清足氏来訪

10月18日（水）晴れ
　元興寺文化財研究所3次元測量

10月24日（火）晴れ
　株式会社近畿ウレタン工事により宇豆柱取上げ開始（am9:00～）

10月25日（水）晴れ
　宇豆柱南柱材取り上げ完了

10月26日（木）晴れ
　宇豆柱南柱材下の精査。鉄製の釿1点が出土

10月27日（金）曇り時々雨
　宇豆柱北東・北西柱材取り上げ完了

10月29日（日）晴れ
　宇豆柱を島根県立埋蔵文化財調査センターに仮収蔵庫へ移動

10月30日（月）曇りのち晴れ
　宇豆柱南柱材中心部直下より鉄製の釿（2点目）が出土

11月8日（水）雨
　広島大学　川越哲志氏来訪

11月13日（月）曇り
　調査区埋め戻し（心御柱周辺を除いた調査区）開始（pm4:30～）

11月16日（木）曇り
　調査区埋め戻し完了

12月10日（日）晴れ
　第3回出雲大社境内遺跡発掘調査指導委員会

写真8　平成12年4月28日報道発表（大型本殿遺構）

写真9　平成12年度一般公開

写真10　平成12年度報道発表（心御柱）

平成13年度

平成13年6月13日（水）晴れ
心御柱調査区仮設工事開始

7月18日（水）晴れ時々曇り
心御柱調査区発掘調査開始

7月24日（火）晴れ
遺構の3次元計測（pm5:00～）

7月25日（水）晴れ
遺構の3次元計測
九州大学　岩永省三氏来訪

7月27日（金）晴れ
第1回出雲大社境内遺跡発掘調査指導委員会（am9:30～）

8月28日（火）晴れ
東京文化財研究所　朽津信明氏調査指導

8月30日（木）雨
遺構の3次元計測

8月31日（金）晴れ
遺構の3次元計測

9月4日（火）曇り時々雨
高円宮殿下御家族行啓

9月14日（金）曇り時々雨
心御柱調査についての報道発表（pm2:00～）
芝浦工業大学　藤澤彰氏、島根大学　渡邉貞幸氏調査指導

9月15日（土）晴れ
一般公開（1,100人）
一般向けリーフレット（発掘調査速報　第3号）を作成、配布

9月16日（日）晴れ
一般公開（1,400人）

9月18日（火）晴れ
株式会社近畿ウレタン工事による南西柱材取上げ作業（am8:30～pm7:30）
福山林継氏調査指導

9月19日（水）晴れ
南東柱材取り上げ（pm1:00～7:30）

9月21日（金）晴れ
北柱材取り上げ

9月25日（火）晴れのち曇り時々雨
3本柱材取り上げ後の柱底部の調査

9月26日（水）晴れ
保存処理検討委員会（am10:30～12:00）

11月6日（火）曇りのち雨
心御柱柱穴完掘

11月9日（金）曇りのち雨
心御柱発掘調査終了
報道発表（pm1:30～）

11月11日（日）曇り
埋め戻し

11月12日（月）曇りのち晴れ
彰古館北側の地形測量開始

12月3日（月）晴れ時々曇り
彰古館北側調査開始

平成13年2月22日（金）曇り
彰古館北調査終了

3月10日（金）晴れ
第2回発掘調査指導委員会

平成14年度

平成14年5月31日（金）晴れ
　年代に関する報道発表（pm2:00～）

6月3日（月）晴れ
　拝殿南調査区発掘調査開始

9月9日（月）晴れ
　指導委員会資料作成
　SD02で土器の集積箇所を確認

9月19日（木）晴れ
　第1回発掘調査指導委員会

10月1日（火）曇り時々雨
　第3層上面検出の石列について調査区拡張

10月8日（火）晴れ
　心御柱開梱・写真撮影

10月9日（水）晴れ
　心御柱写真撮影

11月28日（木）晴れ
　調査区拡張部分で基壇確認

12月3日（火）晴れ
　鳥取環境大学　浅川滋男氏調査指導

12月5日（木）曇り時々雨
　島根大学　渡邊貞幸氏調査指導

12月20日（金）晴れ
　報道発表（pm1:45～2:30）
　藤澤彰氏調査指導

12月21日（土）雨
　一般公開1日目（am8:30～pm5:00）
　一般向けリーフレット（発掘調査速報　第4号）を作成、配布

12月22日（日）晴れ
　一般公開2日目（am8:30～pm4:00）
　拝殿南調査区埋め戻し（pm4:00～）

12月24日（火）雨のち曇り
　拝殿南調査区調査終了

写真11　平成13年度調査時の境内

写真12　平成13年度発掘調査の様子

写真13　平成14年度調査指導の様子

第6節　過去の調査の概要

昭和18年（1943）の仮殿建設（第5図①）の際に遺物が収集されたことで、初めて考古学観点から遺跡と認識されるに至った。この発見の背景には、当時周辺地域で考古資料を盛んに収集していた大谷従二氏の活動があったとみられる。

その後昭和28年（1953）に拝殿が火災で焼失したのを契機に翌29年・30年には本殿防災施設工事が行われ、これに伴って多くの考古学資料が出土し広く注目を集めることになる。これが当遺跡における最初の発掘調査であった。調査には出雲大社職員で大社考古学会の会員でもあった大國一雄氏があたった。

昭和32年（1957）には新拝殿の建設工事が始まり、これに伴う発掘調査が32年・33年にかけて行われた（第5図④）。

その後は発掘調査ではないが、建物建設工事の際の立会により遺物が出土し採集されている。主なものをあげれば、表3の①・⑤～⑧である。

ここでは特に遺物の出土量が多かった①仮殿建設工事、⑤庁舎建設工事、⑥拝殿北地下室建設工事について、表4のとおり出土遺物を掲載している。

仮殿建設時

昭和18年仮殿の造営工事の際に初めて考古遺物の出土が確認され、遺跡として認識されるようになった。この仮殿は本殿の修理工事期間中に御神座を奉安するための仮設の神殿で、戦況の悪化により中断、撤去され、戦後の昭和24年に改めて旧拝殿を仮殿として仮遷座され、昭和28年に正遷座になったものである。位置は荒垣に囲まれた境内の南東隅で、それまでは寛文7年（1667）造営時に建てられた会所があった場所である。後の昭和55年に神祐殿が建設される場所である（第5図①）。

出土した遺物は弥生時代後期の甕、古墳時代前期の鼓形器台、低脚坏、高坏などのほか中世

表3　主要な工事・発掘調査

①	仮殿建設工事	昭和18年(1943)	遺物採取（弥生後期～中世土師質土器）
②	本殿防災施設工事（鉄管埋設トレンチ）	昭和29年(1954) 6月	遺物採取（縄文晩期と認められる大型柱根、縄文晩期から中世土師質土器、鳥居基部とみられる大型柱根
③	本殿防災施設工事（地下貯水タンク設置）	昭和30年(1955)年 6月	遺物採取（縄文晩期～中世土師質土器）
④	新拝殿地下建設	昭和32年(1957) 9月～昭和33年(1958) 1月	縄文晩期～近世の土器・陶磁器／中世の掘立柱柱根、本殿遺構、天正度・慶長度（近世初期）の礎石建物・溝跡
⑤	庁舎建設	昭和37年(1962)	遺物採取（弥生中期～中近世の土師質土器）
⑥	拝殿北地下室増設工事	昭和43年(1968)	遺物採取（縄文晩期～中近世の土師質土器）
⑦	神楽殿建設	昭和54年(1979)	遺物採集
⑧	神祐殿建設	昭和55年(1980)	遺物採集
⑨	地下祭礼準備室建設	平成11年(1999) 9月～平成12年(2000) 3月	弥生後期～近世土器・陶磁器、古墳時代の玉類、中世の短刀、宝治度（鎌倉時代）の本殿遺構
⑩	国庫補助内容確認調査（八足門前）	平成12年(2000) 4月～平成13年(2001)11月	平安時代～近世の土器・陶磁器・宝治度（鎌倉時代）本殿遺構、慶長度(近世初期)の本殿遺構ほか
⑪	国庫補助内容確認調査（彰古館北）	平成13年(2001)12月～平成14年(2002) 3月	縄文晩期・中世～近世の土器・陶磁器、中世の遺構面ほか
⑫	国庫補助内容確認調査（拝殿南）	平成14年(2002) 6月～平成14年(2002)12月	弥生中期～近世の土器・陶磁器、慶長度（近世初期）の御供所ほか

土師質土器皿などがある。出土層位等はいっさい不明である。

庁舎建設工事

昭和37年に荒垣に囲まれた境内の南西隅（第5図⑤）に庁舎建設工事が始まり、同年1月から2月にかけて工事立会により遺物が採集された。遺物に同梱されたラベルの注記を見る限りでは「地下2m黒土層」から中世土師質土器の皿、柱状高台付坏が計3点出土している。拝殿建設時にほぼ同様の深さから中世の遺構が確認されており、境内一円に中世の遺構面または遺物包含層が拡がっていることが推測される。このほかに弥生時代中期～古墳時時代前期の土器が出土しているが、出土層位は「南部地点　下部黒土層」「中層パラス中」と詳細は不明である。

拝殿北地下室増設工事

昭和43年6月には拝殿北側に小規模な地下室を増設する工事が行われた（図⑥）。側壁に矢板を打ち込んでの工事であったため土層の堆積状況は確認されていないが、掘り上がった土中より土器が採集されている。遺物の年代に幅があり、弥生時代前期の木棄文土器（第12図5）、同中期の流水文土器（第12図6）をはじめ、中世土師質土器（第21図3・12）にいたる遺物が採集されている。

昭和54年の神楽殿建設と（図5図⑦）と昭和55年の神祐殿建設の際にも、工事中に掘り上げられた土中から若干の遺物が採集されている。

1．防災工事に伴う調査

昭和29年の調査（鉄管埋設トレンチ）

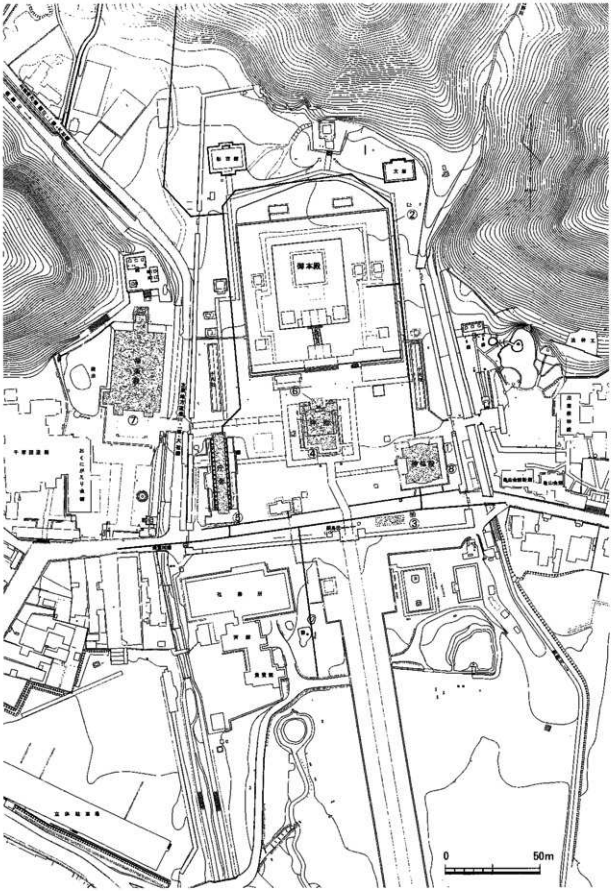
調査の概要

出雲大社本殿防災工事に於いて、昭和29年には防火水道用の鉄管埋設のため、境内の周囲及びその周辺に幅60cm、深さ1～1.8mのトレンチが掘られた（第5図②）。出雲大社裏の奥谷上流の水源地から順次に鉄管を埋設して、出雲大社荒垣に隣接する杉林に到達した10月10日頃、掘り上げられた土の中から土器の細片が発見された。工事はそれより荒垣内に入ったので、工事が進むにしたがって調査が進められ、12月上旬工事が終了するまで調査を行った。

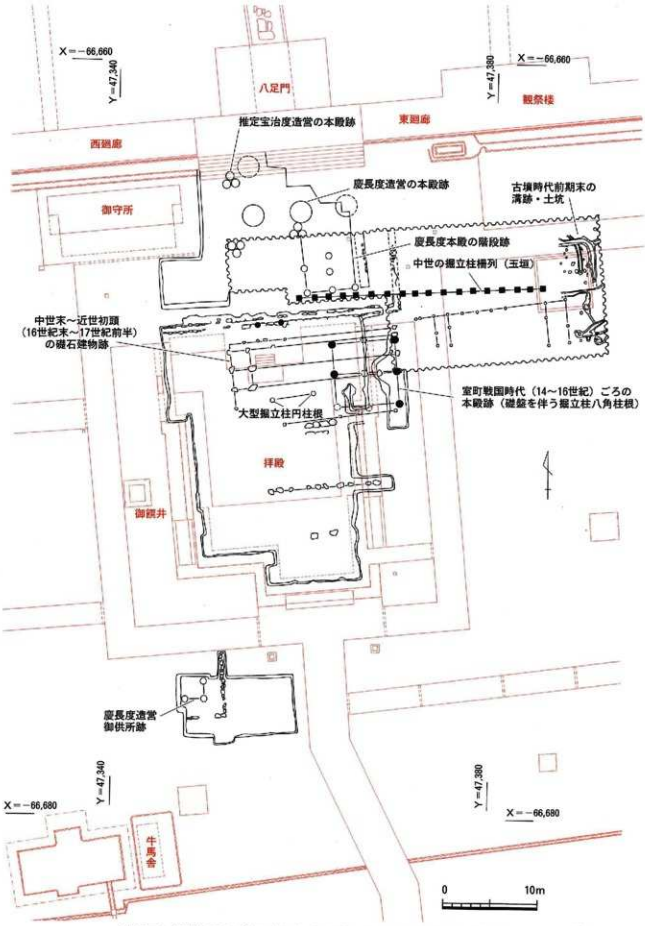
その結果、遺物の分布が広範囲にわたり境内全体が遺跡であることが確認されたほか、境内南西隅から鳥居の基部とみられる大型柱根が出土して、遺構の存在が認識された。以下については報告書（出雲大社1956『出雲大社國寶防災施設工事報告書』）をもとに述べることとする。

表4　境内施設建設に伴う出土遺物

仮殿建設工事	第13図9　第14図11・15・19　第15図11・18　第16図3　第19図17・29・42
新拝殿建設工事	第12図1・2・7・9・10・12～19・21・22　第13図1・2・4～6・8・10～12・14～20　第14図6～10・12・13・16～18・20～32　第15図1～10・12～17・19・20・22～26　第16図1・2・4・5・6・8～11・13・14・16～24　第17図2～9　第18図1～28　第19図1～16・19～28・30～41・43・44　第20図1・2・4～11・13～15・17～29　第21図1・2・4～11・13～20・22～25
庁舎建設工事	第12図8・11・20　第13図3・7・13・21・22　第14図2・4・5・14　第19図18　第20図3・12・16　第21図21
拝殿北地下室増設工事	第12図3～6　第14図1・3　第15図21　第16図7・12・15・25　第17図1　第21図3・12



第5図　出雲大社境内と既往の工事・調査地点（S＝1/2,000）



第６図　遺構位置図（拝殿建設時〜拝殿南、S＝1/400）〔朱書は現境内〕

遺構の概要

鳥居跡

東南七口門より西南七口門にわたって東西に走るトレンチが掘られた際に、西南七口門の東方6mの地下1～2mから、古い木の鳥居の片方の柱根と思われるものが検出された。材は楠で長さ約1m、下端の短径59cm、長径68cm、上端の短径55cm残存していた。下端より57cm上がったところから上には深さ12cmの切込みがあり、そこに18cm×21cm角の横木をはめて南北に渡してあるが、横木は腐食して57cm残っていた。

この周囲の土中には直径約4mの範囲に、根固めのために埋められたと思われる大小多数の石塊が層状をなしており、柱の下も1m掘られたが、その他変何も発見されなかった。

記録によればこの場所には天正8年（1580）から寛延2年（1749）まで毛利輝元寄進の青銅鳥居が建っていたことが伝えられており、併せて考慮すべきであろう。

石垣跡と思われる列石

境内北東の文庫付近より南東に向かって掘られた際には、東十九社の西方1.95mの地下5～40cmから同社に平行する1条の列石が発見された。同社北端付近より同社南端の南方約2mに至るまでの約38mにわたり約40cmの自然石が連なっている。西側の面を比較的揃えているので、古い石垣の根ではないかと考えられる。

地表から列石のある層には遺物はほとんど含まれていないが、地下30cm以下には中世以前弥生後期までの土器等が層序的に包含しており、この列石は少なくともこの時代より新しい時代のものと考えられる。

溝　跡

第1号溝跡

東南七口門より西南七口門にわたって東西の走るトレンチが掘られた際に、東南七口門の西方5～6mの地点で地下55～90cmに、短径30～40cm、長径50～60cmの自然石が2個、約35cmの間隔で東西に並んで検出された。トレンチの南北の壁面には、これらの石と同じ大きさの石が露出していたので、南北に連なる2列の列石の一部であると思われる。また中間には薄い砂利層と砂層とが2層ずつ互層しているのが認められた。こうしたことからこれらがトレンチを横断して、南北に延びる溝跡の一部であることが推定される。ちなみに地表からこの溝跡のあたりまでは山土と石英細砂との互層または混合層により成り、明らかに埋め立てられた土層であるが、溝跡の下部以下は灰色粘土層よりなり、この層から中世のころのものと思われる土師質土器が多数出土しているので、この溝跡はこの土器より新しい時代と推定される。

第2号溝跡

西南七口門の東方20mの地下50～90cmにも長さ約70cm、幅20～25cm、厚さ30～40cmのやや扁平に近い自然石が2個、約35cmの間隔で東西に並んで検出された。このトレンチの南北の壁面には、これらの石と同じ大きさの石が露出し、両者の中間には厚さ約7cmの有機質の層が認められ、これも南北に延びる溝跡の一部であることが考えられる。ちなみに地表からこの溝跡の層位までは粘土や川砂利の単層で遺物はほとんど含まれないが、この溝跡の下端以下には厚さ約20cmの黒青色粘土層があり、これらは中世のころと思われる土師器が多数包含されているので、この溝跡も第1号溝跡と同じくこの土器よりやや新しい時代のものであることが考えられる。

第3号溝跡

西南七口門の東方10～11mで、第2号溝跡の西方約10mの地下35～65cmにも長さ60～70cmの自然石が2個、約35cmの間隔で東西に並んで発見された。このところでもトレンチの南北壁面には自然石が露出しているのが認められた。これも南北に延びる溝跡の一部であることが推定されるが、第2号より層位的にやや上にあるの

できさらに新しい年代のものと思われる。

昭和30年の調査（地下貯水タンク建設）

調査の概要

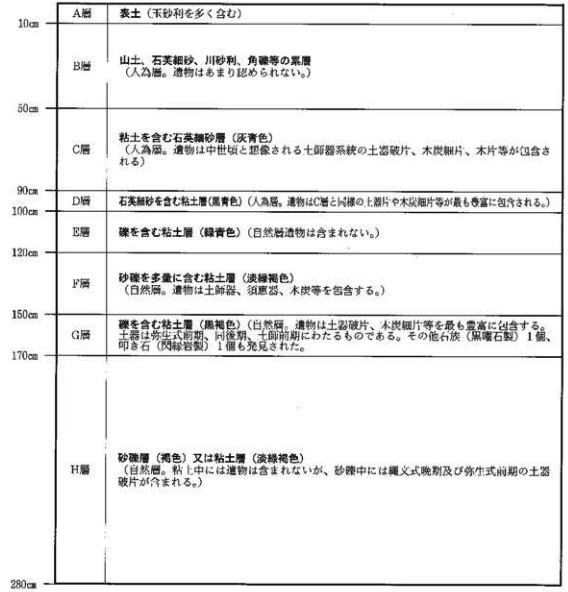
昭30年（1955）年の工事は境内南辺、青銅鳥居の東方約20mの地点に地下貯水タンクを設置するために大規模な竪坑を掘るもので、前年の調査によって予め遺物が出土することが予想されていたので、工事による掘削と平行して調査が行われた（第5図③）。竪坑の面積は5m×15m、深さ3mに及び、縄文～中世までの整然とした層序が確認された（第7図）。

遺物の概要

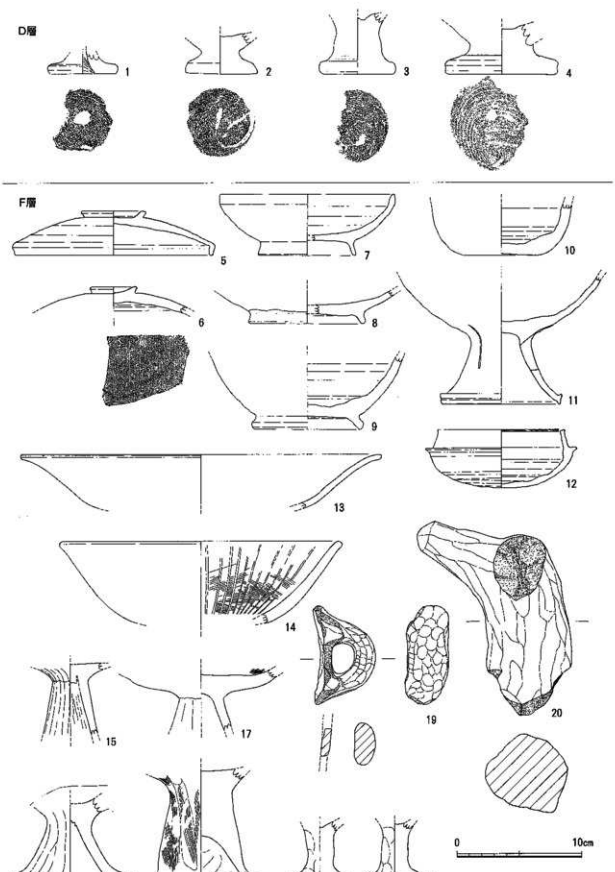
地表から地下280cmまでのまでの土層がA～Hの8層に分層されており、そのうちDFGHの各層については出土遺物との対比が現在でも可能である。第8図～第10図には出土した遺物を層位別に図示した。以下概要について述べる。

D層（第8図1～4　写真14）

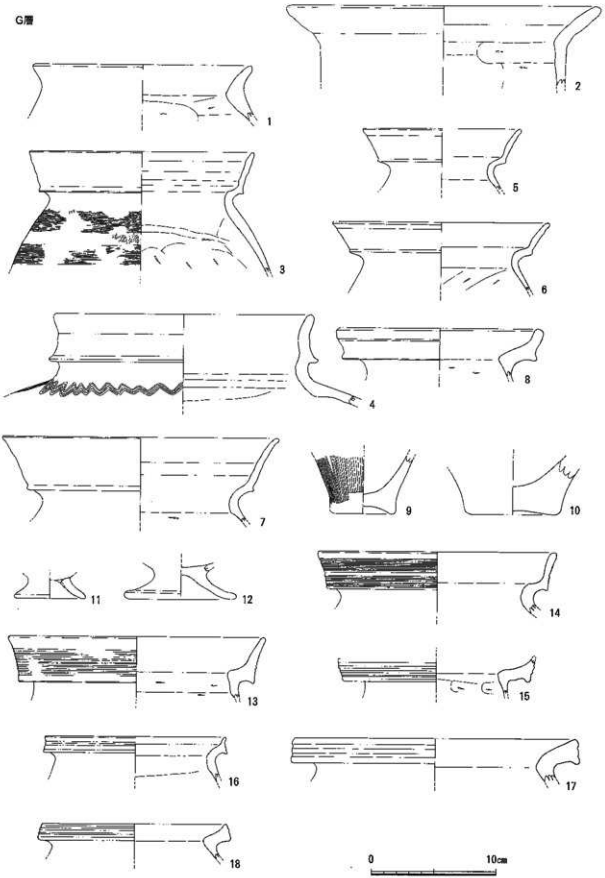
いずれも土師質土器の柱状高台付坏で、高台部以下の破片である。詳細な時期は断定できないが、概ね12～13世紀のものである。



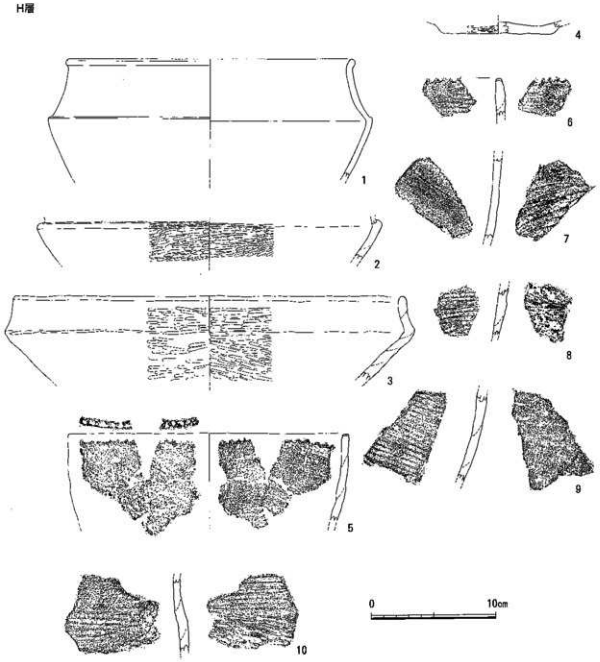
第7図　地下貯水タンク建設時の層序関係
（出雲大社 1956『出雲大社國寶防災施設工事報告書』を基に作成）



第８図　地下貯水タンク建設に伴う出土遺物実測図（1）（S＝1/3）



第9図　地下貯水タンク建設に伴う出土遺物実測図（2）（S=1/3）



第10図　地下貯水タンク建設に伴う出土遺物実測図（3）（S＝1/3）

F層（第8図5～22　写真14）

5～12は須恵器、13～22は土師器及び土製品である。若干の時期幅が認められる。5～8は蓋坏で、7世紀後半から8世紀前半のものである。9．10は壺類の底部破片でそれぞれ長径壺などであろう。11の低脚無蓋高坏は3方に切れ目状の透かしをもち、古墳時代後期後葉、6世紀末から7世紀初頭のものである。12の坏身は他の須恵器と比べて古く、古墳時代後期前葉、出雲2期に属する。6世紀前半頃であろう。

土師器・土製品は破片のみであり、良好な資料ではないが、かなりの時期幅がうかがえる。13・17の高坏坏部や19の山陰型甑形土器の把手部分などは古墳時代前期のものと見られる。さ

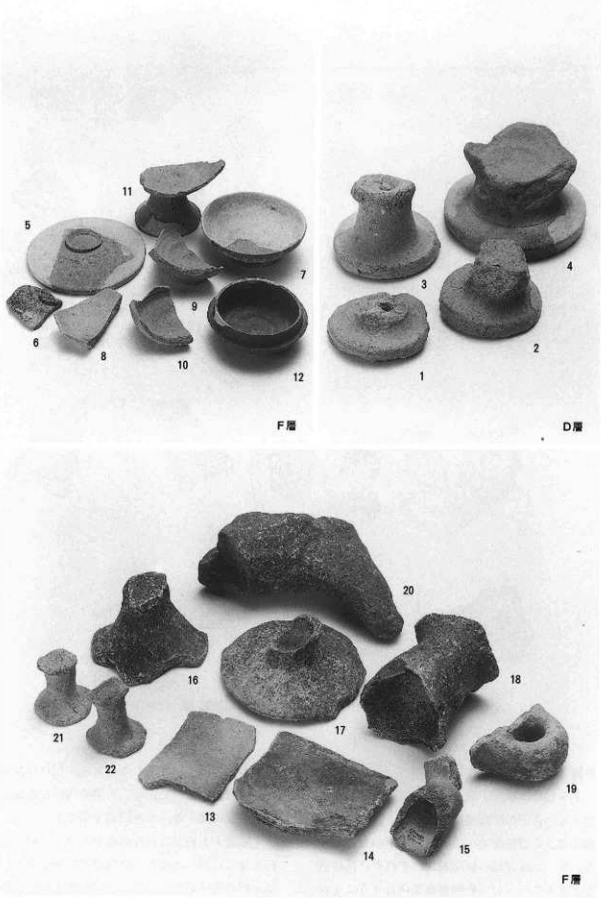


写真14　地下貯水タンク建設に伴う出土遺物（1）（番号は第8図と対応）

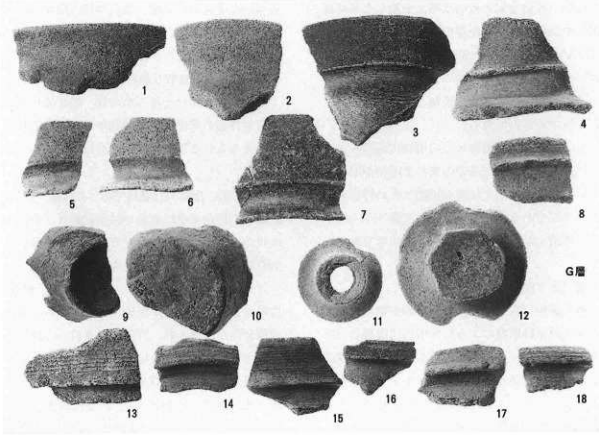


写真15　地下貯水タンク建設に伴う出土遺物（2）（番号は第9図と対応）

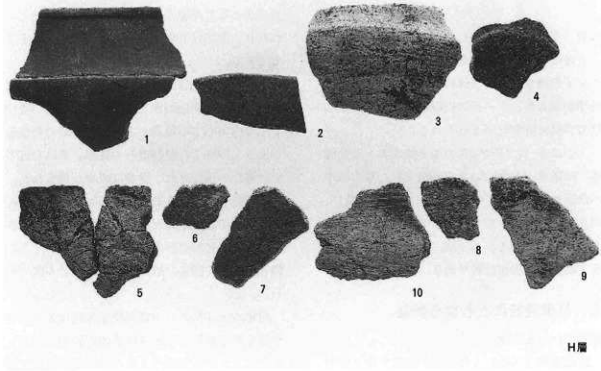


写真16　地下貯水タンク建設に伴う出土遺物（3）（番号は第10図と対応）

らに14（赤色塗彩と放射状暗文を施した高坏坏部）や15は古墳時代中期の可能性があるもの、16・18（高坏脚部）、20の土製支脚などは古墳時代後期～奈良時代のもの、21・22の製塩土器の棒状脚部分は古墳時代後期、実年代にして６世紀後半のものである。

上記のようにＦ層中には古墳時代前期～奈良時代前半の明らかに時期の異なる遺物が混在している。個々の出土状況が不明なため堆積の経過は不明であるが、単一層として扱うならば下層が堆積した年代の上限は８世紀前半である。

Ｇ層（第９図　写真15）

出土遺物は弥生時代後期の土器が中心だが、１・２の土師器甕のように古墳時代後期の以降のものも混じっている。これらを除くと時期的に比較的まとまりがあるため、１・２は上層からの混入品である可能性も否定できない。９・10が壺・甕の底部、11・12が低脚坏である以外はすべて甕の口縁である。時期は弥生時代後期初頭（松本編年Ⅴ－１様式、草田編年１期）から弥生時代後期最終末（大木式、草田編年６期古相）のものまでが含まれる。

Ｈ層（第10図　写真16）

砂礫層中に縄文晩期の土器を包含している。１～４の無文の精製浅鉢は山陽の岩田式並行で晩期初頭ごろ、５～10の口縁部に刻み目をもつ精製深鉢は晩期後半とみられる。

上記のように昭和30年の地下貯水タンク建設時には縄文～中世にいたる整然とした基本層序が確認された。当時の掘削は地下280㎝に及び、現在までの数次にわたる調査の中でも、最も深く掘り下げている。最下層で確認されたＨ層は縄文晩期の遺物包含層である。

２．拝殿建設にともなう調査

調査にいたる経緯

昭和28年（1953）５月10日、出雲大社正遷宮が執り行われ、その祝祭期間も略終と終わりに近づいた５月17日早暁、境内の鐵火殿から出火し、鐵火殿、庁舎、拝殿が消失した。

昭和31年秋までに、旧拝殿の火災に遭っていた礎石や桂石等は取り除かれ、整地が行われた。

調査のきっかけとなったのは、昭和32年９月から新拝殿の基礎工事が開始され、同月27日に溝跡とみられる石列や柱根が発見されたことであった。

これ以後、出雲大社職員であった大國一雄氏、錦織郁夫氏が工事に立会い図面記録などを行ったほか当時島根大学助教授であった山本清氏も調査指導として何度か現地を訪れている。

こうした工事立会により、石組や溝跡、礎石、柱根など重要な遺構が多数出土したため、遺跡の重要性が指摘され、同年12月８日からは当時京都大学教授であった福山敏男氏を団長とする調査団が結成され、調査員としては伊藤実太郎氏（東京国立文化財研究所）、金正基氏（東京大学考古学研究室）、山本清氏（島根大学助教授）、補助員として出雲大社職員の大國氏、錦織氏、小林藤一氏が調査に参加した。

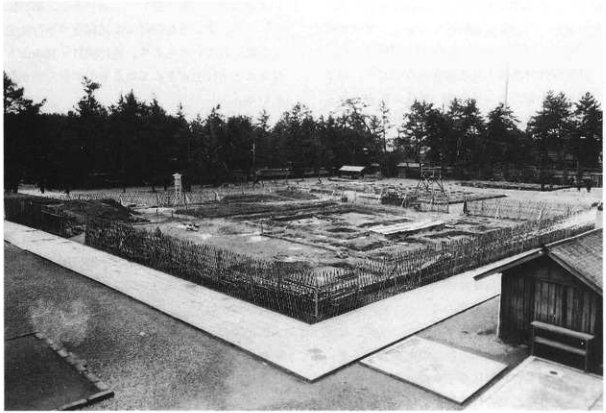
この時すでに新拝殿の基礎工事は終了し、すべてのトレンチはすでに埋め戻されていた。調査は主として基礎工事を免れた部分について行われた。期間は32年12月８日～翌33年１月末までである。

上記の新拝殿建設に伴う調査は初めて学術目的で行われた発掘調査であり、また遺構が集中する境内中心での調査であった。本殿の可能性があるものを含む建物礎石や柱根、溝跡など多数の遺構が確認され、重要な成果が得られた。

新拝殿建設に伴う調査では450㎡が調査され、出雲大社の各種施設とみられる中近世の建物跡など、重要な成果が多く得られている。
調査地点第５図④、遺構平面図は第２５図で示した。

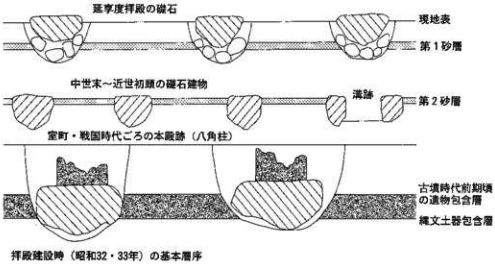
昭和32年９月からの調査開始当初はあくまで基礎工事を優先した記録作成の応急調査であったこと、また本格調査となった同年12月には既に縦横の基礎が完成しており、残された隙間を

（調査地から本殿を望む、1957.12.12撮影）



（調査区全景、北東観察様から 1957.12.８撮影）

写真17　拝殿建設時調査状況（1）



第11図　拝殿建設時（昭和32・33年）の基本層序模式図

調査するしかなかったことなどの制約により、拝殿の建物範囲前面が網羅的に調査されたわけではない。たとえば建物跡について、すべて柱跡が確認されていないのはそうした理由による。

調査記録は出雲大社に保管されており、以下は調査参加者であった大國一雄氏の報告文をもとに成果の概要を述べる。基本的な層序関係、遺構面の重複は第11図に示したとおりである。

出土遺物の概要（第12～21図　写真18～写真34）

主に昭和32年・33年の拝殿建設に伴う発掘調査の遺物を掲載しているが、第４表のとおりである。

出土遺物の年代は縄文時代晩期から現代までほぼ連続しており、基本的に大きな断絶は無いといえる。ただし遺物量を時期的に比較した場合は若干の粗密が認められるのも事実である。当遺跡で最も古い年代を示すのは第11図11・２で示すような縄文時代晩期のものである。昭和30年の防災工事や後で述べる平成13年の彰古館北調査区でも出土しているが、出土量は比較的少ない。

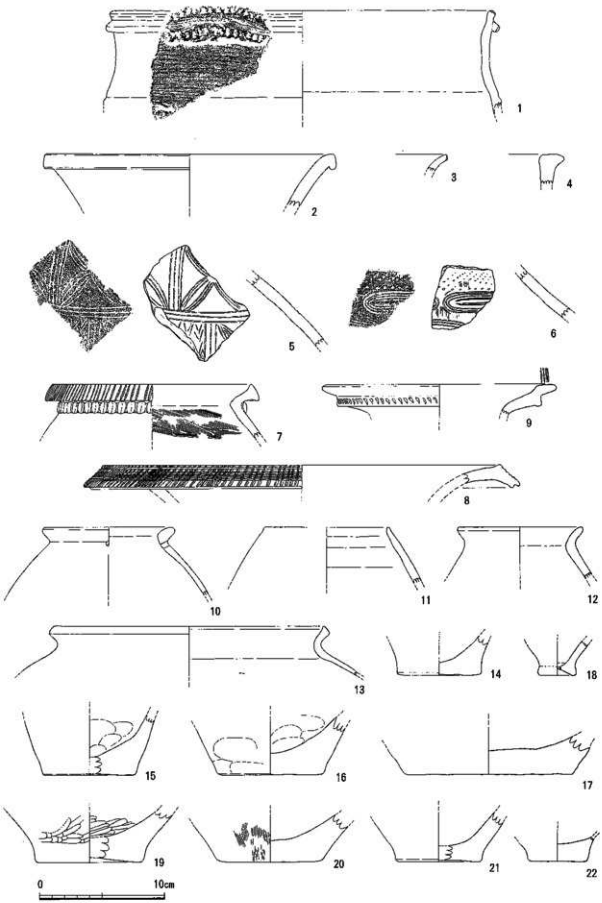
弥生時代の遺物は前・中・後期とも出土しているが、特に後期の甕の出土量が多く、第13図２・６で示すような口縁部に凹線文や平行沈線文を施されているものや、第13図11・12のようなヨコナデ仕上げされているものが多く出土している。

古墳時代前期にかけても、安定した環境下の中でまとまった量の土器が出土している、第14図の土師器の甕・鼓形器台・低脚坏、第14図の高坏などがある。

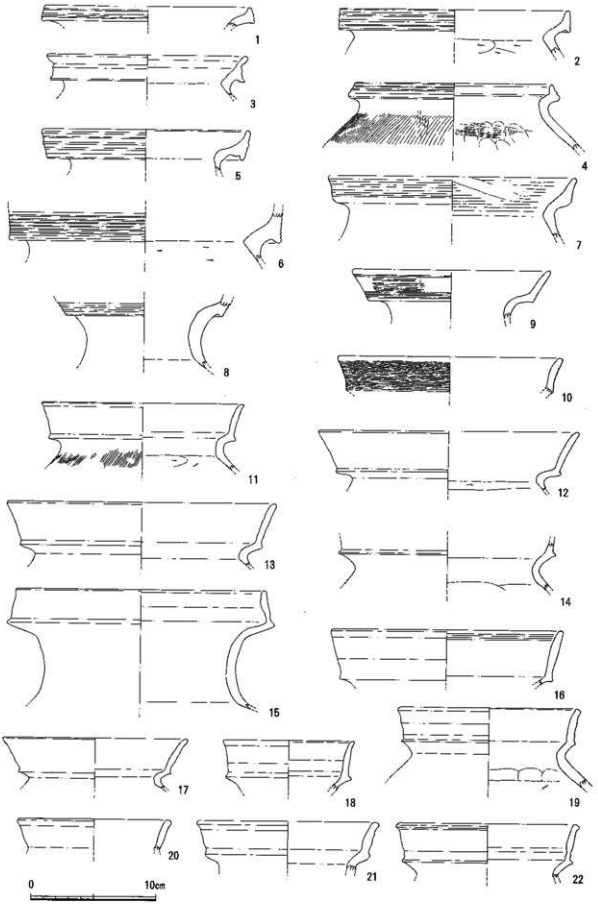
その後古墳時代中期から後期にかけては相対的に遺物量が少ないが、第16図の５・６のような須恵器の蓋坏などが出土し、第17図６～８は製塩土器の棒状脚部分で報告例が比較的少なく注目される。

第15図の下段の単純口縁甕と図16の須恵器坏類は６～９世紀のものである。

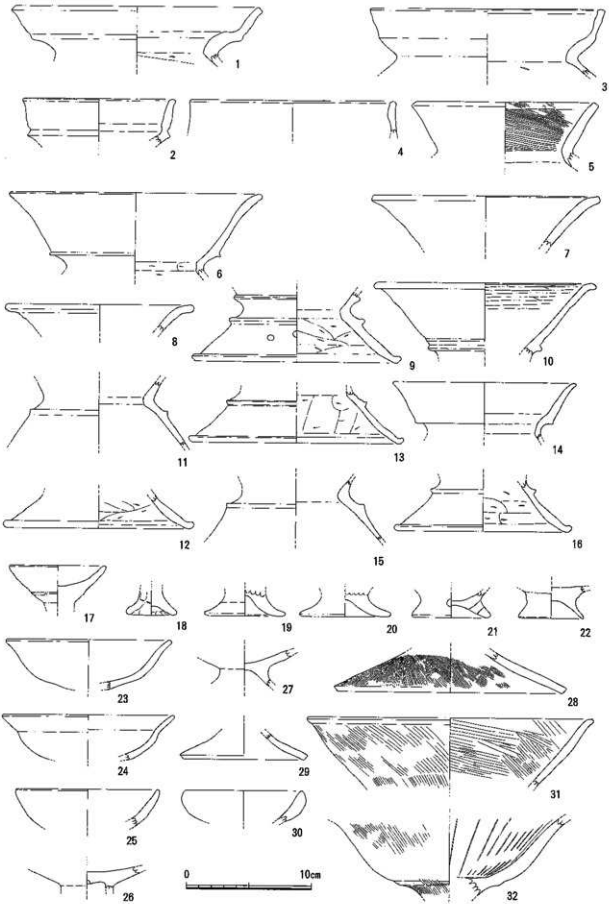
第18・19図に示した土師質土器坏と皿は、一部の坏には11世紀にさかのぼるものも含まれるが、おおむね12～17世紀のものである。



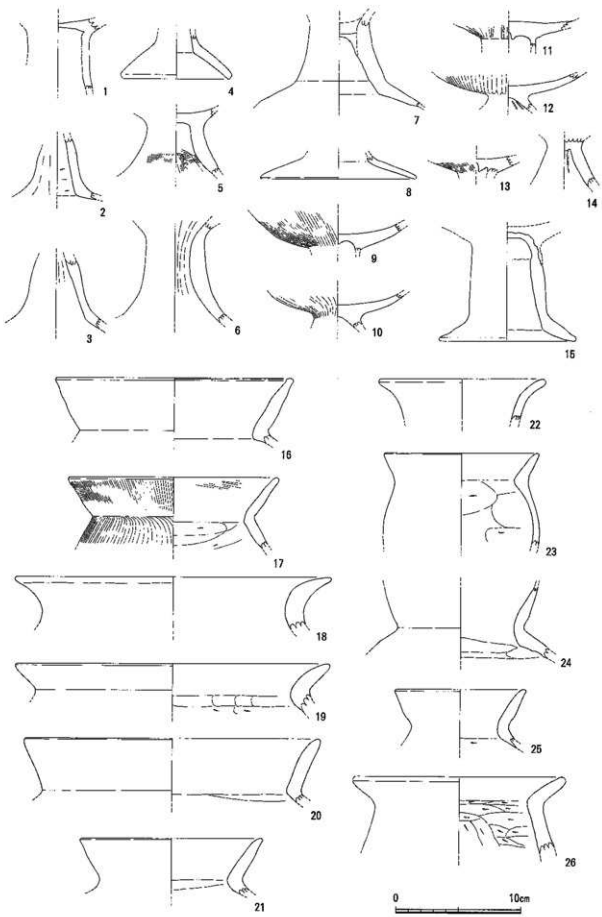
第12図　境内施設建設に伴う出土遺物実測図（1）（S＝1/3）



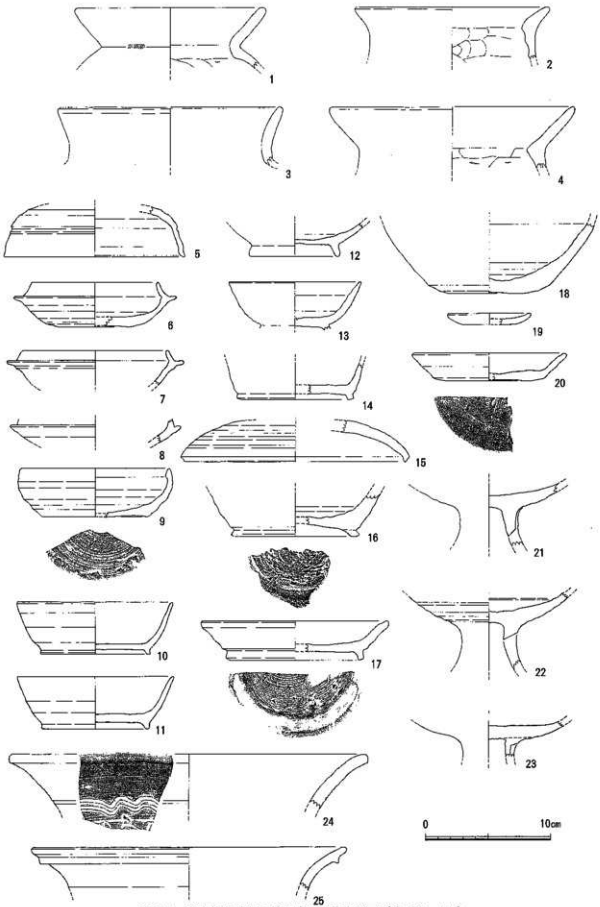
第13図　境内施設建設に伴う出土遺物実測図（2）（S＝1/3）



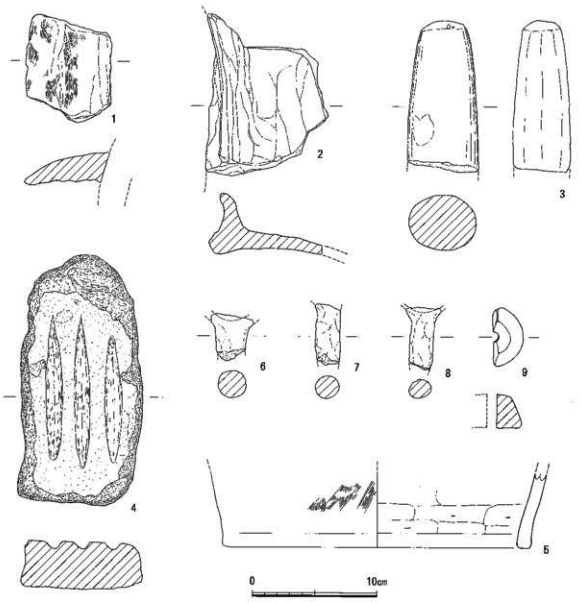
第14図　境内施設建設に伴う出土遺物実測図（3）（S＝1/3）



第15図　境内施設建設に伴う出土遺物実測図（4）（S＝1/3）



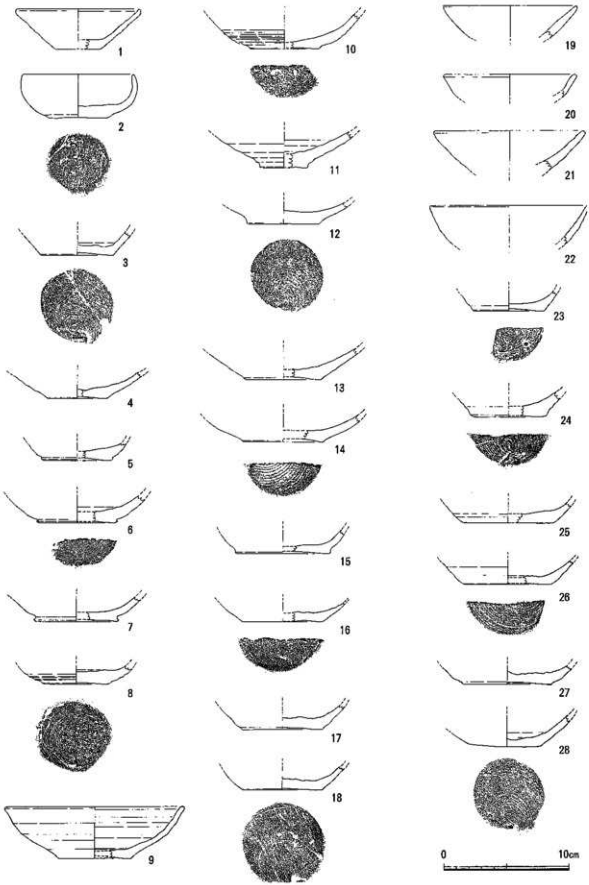
第16図　境内施設建設に伴う出土遺物実測図（5）（S＝1/3）



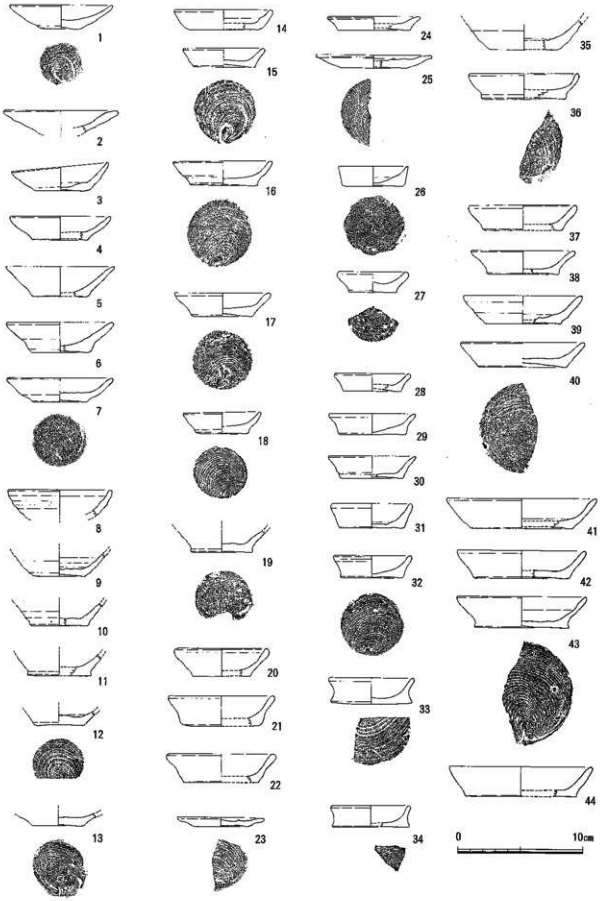
第17図　境内施設建設に伴う出土遺物実測図（6）（S＝1/3）

第20・21図は土師質土器柱状高台付坏であり、当遺跡で極めて特徴的なのが柱状高台付坏の出土の割合が非常に高い点である。12世紀～13世紀であろう。この器種は居館跡、寺院関連などでの出土例が多く、日常具というより宗教行為や儀礼に用いられた可能性が高い。

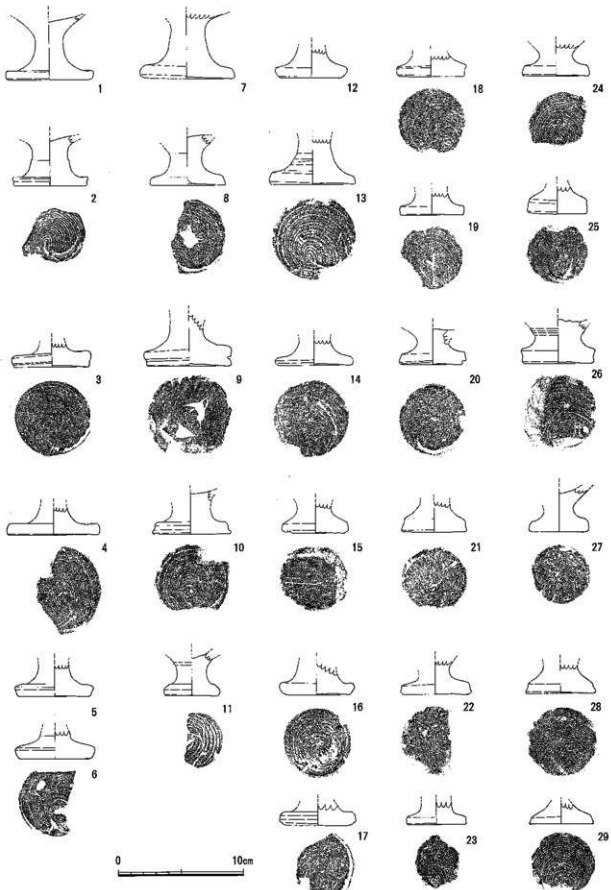
中世以降の陶磁器については昭和32・33年の調査時に出土しており、今回破片点数の集計を行った（表5）。なお出土層位は表土～第二砂層上面までが覚文度以降、第2砂層下～慶長度以前の七層である。基本的に後世の土層に混入したものであるため、おおまかな傾向しかつかめないが、比較的古いものとしては写真26－1の白磁（12世紀）、写真27－1～3の青磁（1：12世紀、2：同安窯で12世紀中葉以降、3：B1類で13世紀後半～14世紀前半）が少量認められる。この後は白磁A期（14世紀）、白磁B期と青磁B3類（14～15世紀）、白磁D期と青磁D類・E類（15世紀頃）、青磁B4類（15～16世紀）、白磁E期と青花（16世紀から17世紀初頭）が一



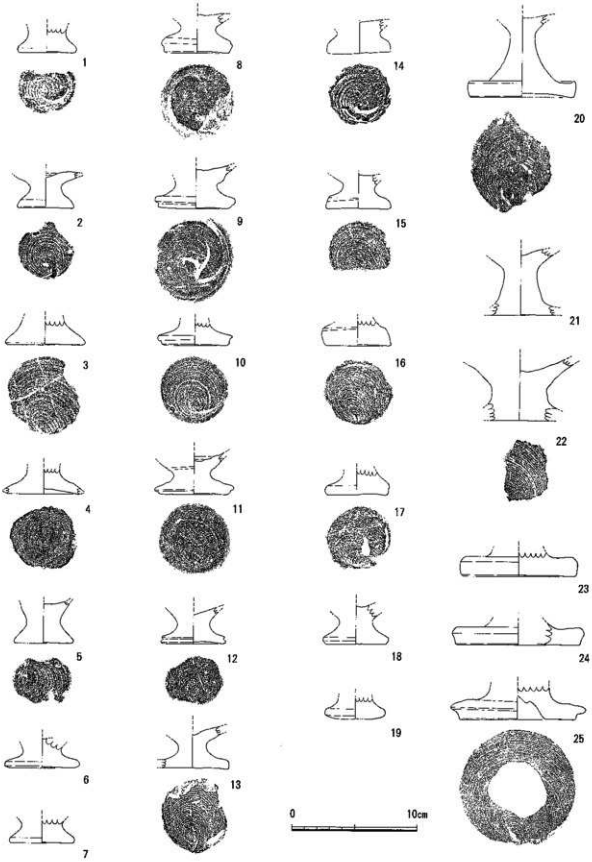
第18図　境内施設建設に伴う出土遺物実測図（7）（S＝1/3）



第19図　境内施設建設に伴う出土遺物実測図（8）（S＝1/3）



第20図　壙内施設建設に伴う出土遺物実測図（9）（S＝1/3）



第21図　境内施設建設に伴う出土遺物実測図（10）（S＝1/3）

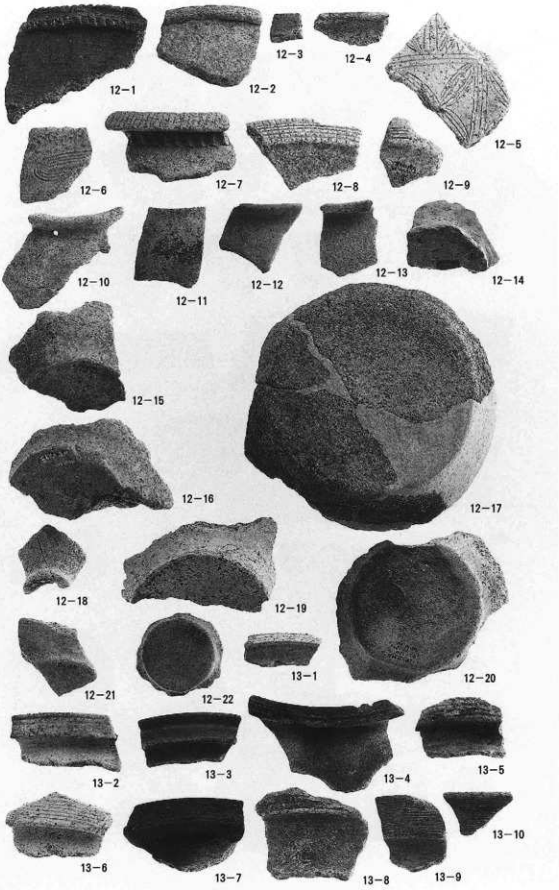


写真18　境内施設建設に伴う出土遺物（1）

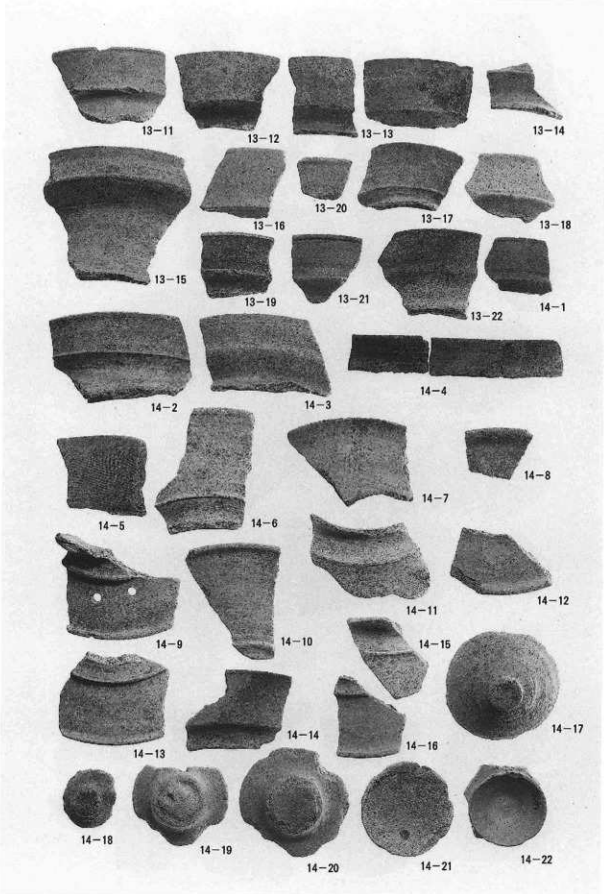
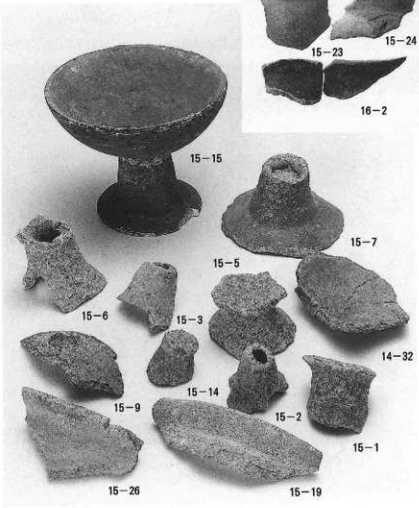


写真19　境内施設建設に伴う出土遺物（2）（番号は図版番号に対応）



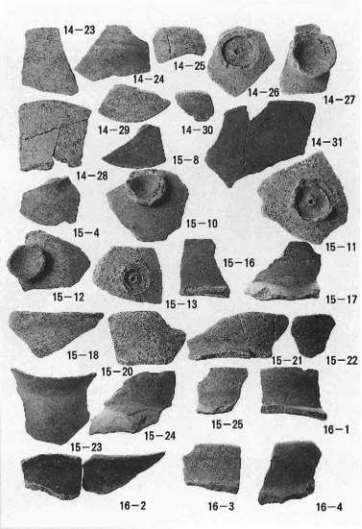


写真20　境内施設建設に伴う出土遺物（3）

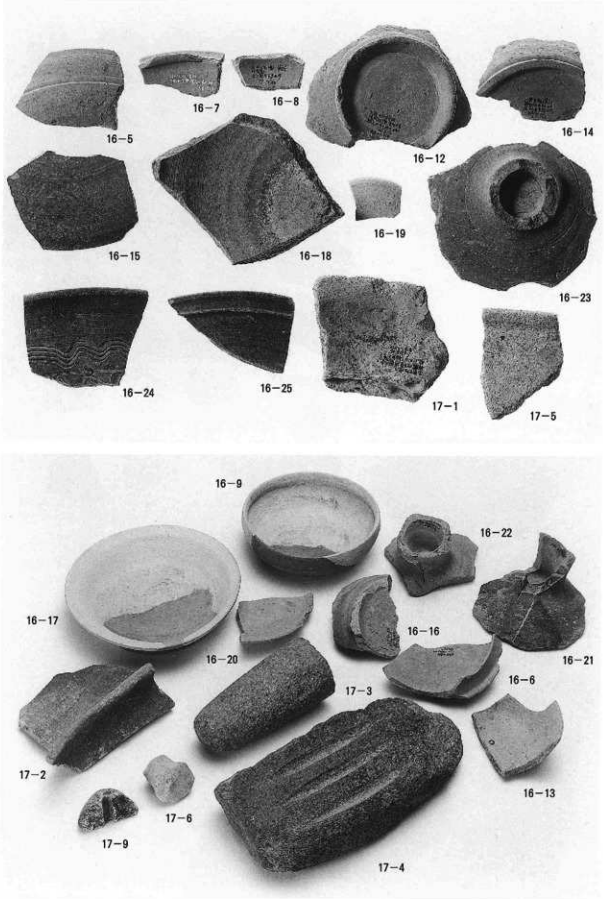


写真21　境内施設建設に伴う出土遺物（4）

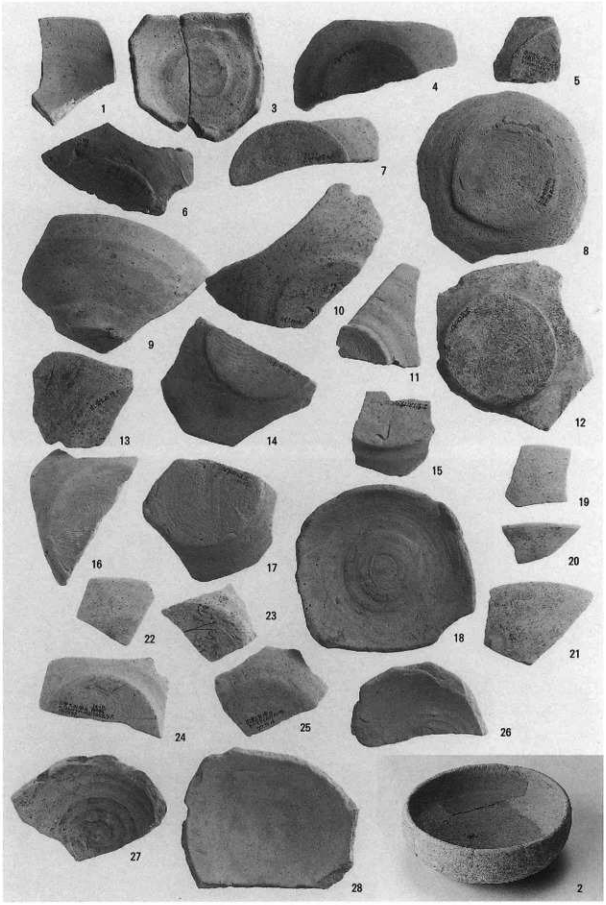


写真22　境内施設建設に伴う出土遺物（5）（番号は第18図に対応）

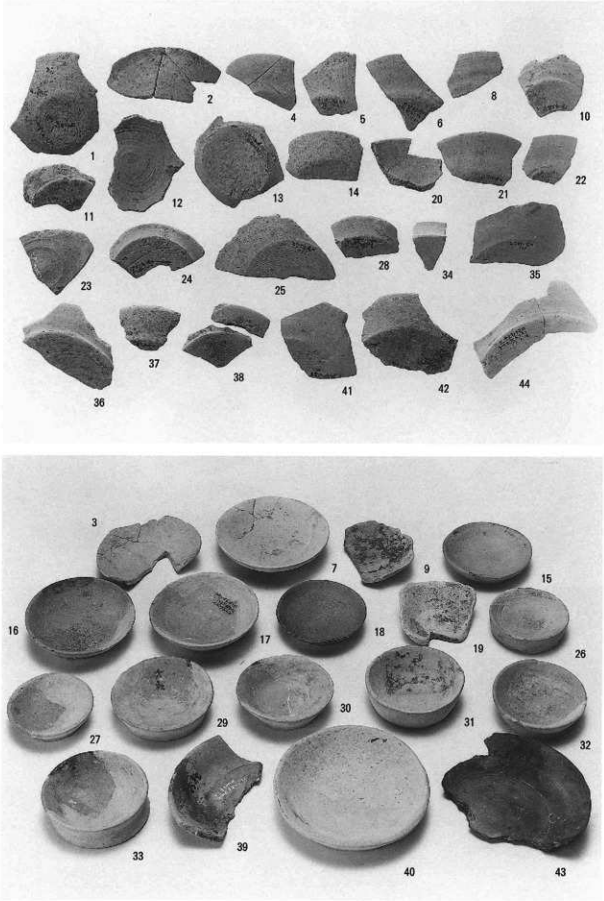


写真23　境内施設建設に伴う出土遺物（6）（番号は第19図に対応）

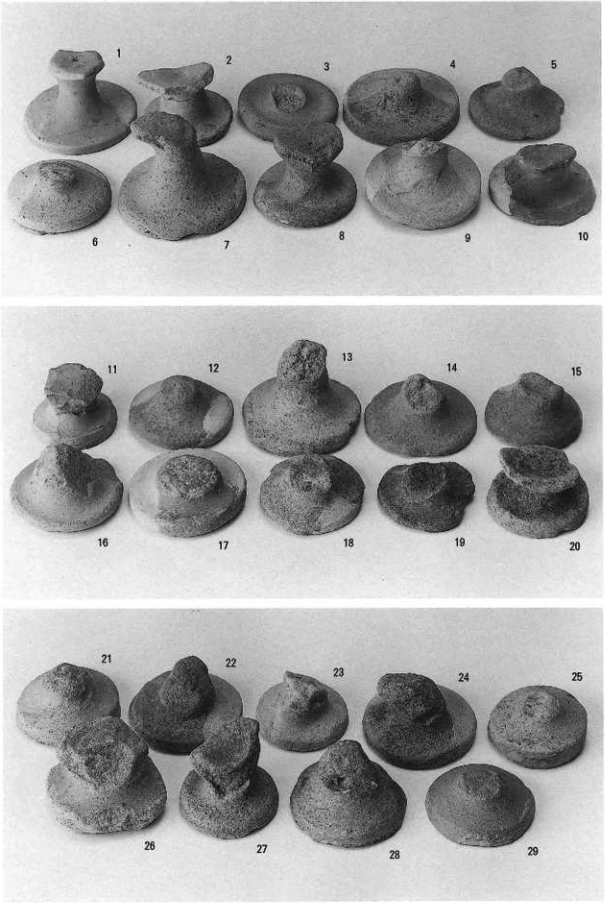


写真24　境内施設建設に伴う出土遺物（7）（番号は第20図に対応）

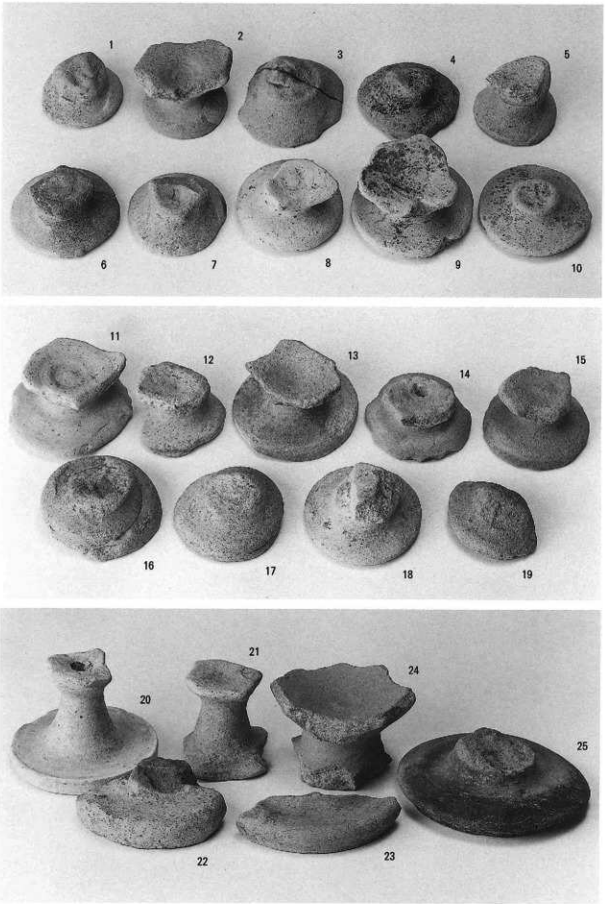


写真25　境内施設建設に伴う出土遺物（8）（番号は第21図に対応）

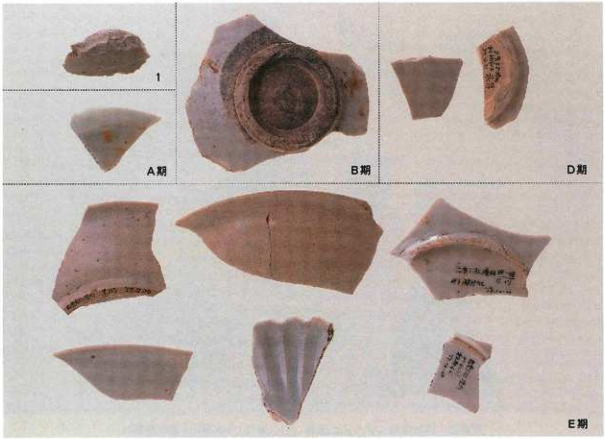


写真26　拝殿建設に伴う出土遺物（1）（白磁）（本書42・60P参照）

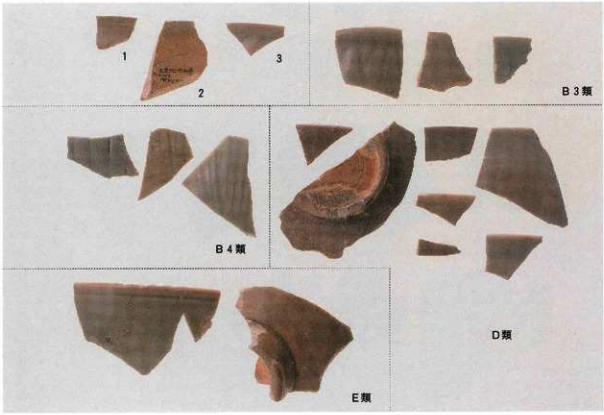


写真27　拝殿建設に伴う出土遺物（2）（青磁）（本書42・60P参照）

写真28　拝殿建設に伴う出土遺物（3）（青花）（本書42・60P参照）

写真29　拝殿建設に伴う出土遺物（4）（肥前系磁器）（本書42・60P参照）

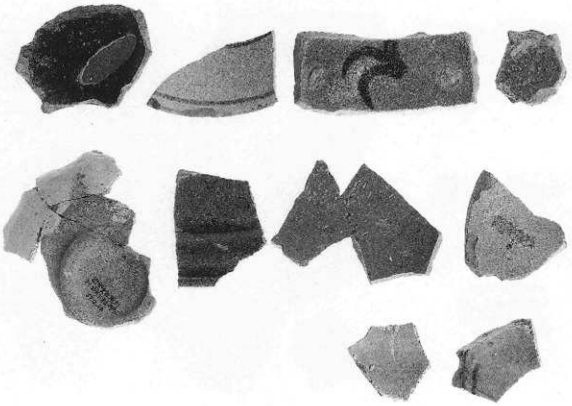


写真30　拝殿建設に伴う出土遺物（5）（肥前系陶器）

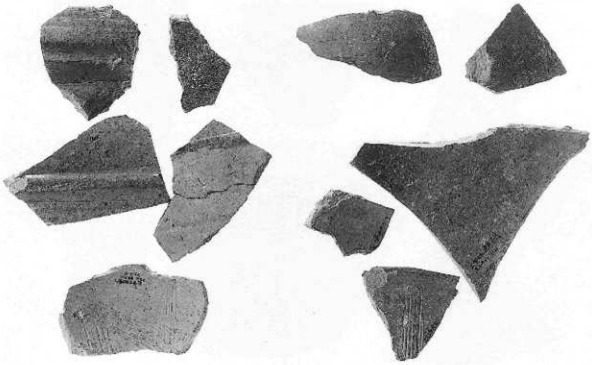


写真31　拝殿建設に伴う出土遺物（6）（瓷器系陶器）